# 神名考

神道同志會々長男爵　千家尊福君序文
神宮奉齋會々長　藤岡好古君跋
故　琴　舍　堀　秀成翁著

# 神名考

瓢舍藏版

# 神名考はしかき

みがける玉も世にしられてこそそのひかりを人もめではやすべけれ賤か伏屋の奥床にちりにうつもれたらむにはめづる人もなくすぎぬめり堀　秀成翁は予か知る人にていきのかぎり國典國語の研究に身をゆだね貳百部あまりの書を著はされしことははやく聞およべり櫻木にゑりて世に出されたるものは十部あまりにてあはれしみのすみかとなりちりうせなむとしけるををしへ子の藤岡好古ぬしからくしてとりをさめをりを得て世におほやけにせむこゝろかまへせりこたひその一部の神名考をしも我神道同志會より世に出すこゝはなしつ此の神名考はも神職たるものはいふもさらなり同志の人々は必讀べき書なり天地萬物をむすびなし

たまへる神をはしめ風火水木金土の五元の神國造らしゝ神をもらさずあげて御名の義と御德とをつばらに說れたり此の神名の解釋は古事記傳古史傳におほかた說れたりといへどもいまだくはしからぬもあり考へ定められざるもありてなみ〳〵の學者の知りかたきことなるを翁が音義學の力以て天地日月の言義など神名にあるかぎりの古言を解れたれば座右かくべかざる書とそいはまし今この書の世にあらはれしは磯か伏屋の奥床にちりにうつもれたりしみがける玉の見出られて世にひかりをはなてるさまによく似たりとやいふべからむかくいふものは神道同志會の會長千家尊福

時は明治四十二年四月十七日



# 神名考自叙

古書能有類賀中爾母。古事記者最母貴久最母正支御記那禮婆必明免受弖波阿羅奴御記登波先此御記乎云可而弖其傳者前能識者能書類書等乃中爾勝禮弖愛甚書止波禰閉都可支傳奈運杼。何爾曾夜止打傾流々、條杼毛那支爾之母阿羅奴賀中爾。神乃御名乃說爾至弖者信美難支術止毛尠加良受。其乎悉久說支直志太流書末有利登母閇延受。故學問淺支己賀事爾波負氣無支事止者於保由留物加羅其說乃僻免類所々說支直志試武止思布事者。年麻爾久思比續氣太流事那賀羅。何久禮登著志弖武止思比凝利太流書登母多賀禮婆得之母其事起須可支時那久弖過之都。然流爾近頃讚岐國事比羅乃宮能編輯局能長太郎舞事能招爾從弖其所爾在弖種々乃書共選問流事能次爾。神達乃

御名能解阿良麻保久止誂阿利計類遠好支時止之旦此書乎波書支綴都類也。抑上禮流世乃事母。今乃世乃事越母。落流限無久遺流所那久知里明免那武止願布者學者乃常乃意爾波阿禮杼。限有流生涯爾何傳加之乎明米得可支。誰之能人加之乎爲得太利止云武然禮杼母其中爾諸之神達能御功德那武明爾辨欲支事那留閉支。其御功德乎明爾世武爾者其御名乃義乎明爾寸流曾先始爾波阿類。是此神名考撰閉流事能由爾波有流也。

明治十九年六月

堀秀成述



# 緒言

此書古事記に載する所の神名の解を以て前編と爲し書紀風土記神名帳等に載せたるは後編に讓るものとして前後二編を以て神名の解を全くす

神名の義解專ら古事記傳の説の可否を論して而して己が説を擧ぐ其他の説に至ては可否共に大に異るものゝみを擧げて論せり

神名の言義を解くに其言の音義に因りて原義より云へるものあり又之を省くものあり其音義を擧ぐるものとは其原義より云はざれば明解を得ざるものに限り其他一涉の解を以て聞えたるものは之を省けり

神名の義未考得ざるものは或は古事記傳の説をのみ擧げ或は姑く試の説を擧げたるもあり又同書にも未思ひ得すとのみあるは偶々其解を遺したるものあり

神名は其知り坐す所の功德を以て負ひ給へるもの十中の七八にあり而して其神性に因り或は其成坐せる所の由縁に因り或は地名に因り又は父母祖父母の

神等の名を製ひ給ひしもの其二三にあり此等のことは別に云ひ置けるを見て辨ふべし

明治十年夏

著者識



# 神名考目次

一之卷



二之卷

目次終



# 神名考一之卷

## 加微之言義

堀秀成謹著

萬物の名は其體又は其用を人の音聲の貌に象りて呼び始めたるものなれば(其說と其證は音圖大全解に云へり)其物を呼ぶ音聲の義を明に爲して其言の原義を極むる時は其體用は紛ふ方なく辨へらるゝものなり然して萬物の有るが中に加微といふ言義は先つ始めに知らずばあるべからず故先哲二三の說を擧げて次に己が說を云ふべし本居翁の說に凡て加微と云ふ物は古の御典に見えたる天地の諸の神達をはじめて其祀れる社に坐す御靈をも申又人は更にも云はず鳥獸木草の類海山など其餘何にまれ尋常ならず優れたる德ありて可畏き物を加微と云ふなり優れたるとは尊きこと善きこと功しきことなどの優れたるのみを云ふにあらず惡しき物奇しき物なども世に卓れて可畏をば神と云ふ云々かくて加微といふ名義はいまだ思ひ得ず(古事傳探要)又平田翁の神といふ言の義は御紀の卷首に古天地未剖陰陽不分渾沌如鷄子溟涬而含牙云々とある牙なりさて加備の加は彼の意にて物を夫れと指して

云ふ言備は靈妙なる物を云ふ語なりかくて加備と加微と同じく加夫とも加牟とも通へり頭大きく本細き形を云ひて頭槌之劒鏑矢などの加夫も本より同言なり云々三柱の大神の産靈に因りて始めて大空に生し出し給へる一つの物の中に含まりて奇靈なる極なるが終に燃騰りて天津國と成り天の御柱とも成り云々斯てこの加備てふ物の形狀を考るに決めて男易の形なるべくおぼゆ抑かの一の物に含まりし加備は物の成形始なるが其物つひに拔け出て天津日と成り云々さて加備と加微は同じ言にて其いと奇異に妙なる事を稱ふより及び造化の事に關り給ふ加微等は申も更なり凡て世に奇しき功德ある者をば加微といひそをやがて神と書けり(古史傳採要)又久老の說に神とは畏み恐るゝ意にて萬葉集に大王の御言畏みと見え千早振神ちふ枕詞もたゞ神靈の意につゞけたるにはあらで神はかしこむにつゞけたるなり神素盞嗚尊とあるも其神性の武く坐しますを恐憫意にて神とは申し奉るなり(槻落葉採要)此れ等の說己れに於ては信難し何かにとならば先つ本居翁の說は神と指す物の說にて加微と云ふ名義はいまだ思ひ得ずとあれば今此所に論ふ限にあらざれども其神と指すものを人は更にもいはず鳥獸草木の類云々尋常に優れたる德ありて可畏物を加微と云とは云ひ轉したる末の意にて直ちに神を指して云ふとは本末の違ひあり其は本神德の奇異にして人智を以て窺ひ慮る可らざるより他の物にも尋常に卓れて可畏物をも加微と云へるにて天地の神を指して云ふとは異れり又平田翁の說に神といふ言の義は含牙とある牙なり加備の加は彼の意にて備は靈妙なる物を云ふとあるは殊に取りがたし何にとならば彼とは此に對へたる言にて今少し近きを夫是と云ひ放れて相對へるを彼是といひて其加は間貝方側河また交替貸借等の加と同じく物の相向ふを云ひ禮は指す言にて吾己誰汝等の禮に同じくして牙の加の音義とは異れり牙の加は短きもの丶形狀を云ひて蕪株屈悴縱等の加に同じく備の淸音は秀歷光開等の比に同じく秀進む義あるを濁音になりては終に秀べきもの丶縮みたる義あれば彼と牙との音義は比しからず然れば加微と加備とはもてはなれたる言義なるをや又久老の說の神は畏みなりとするは本居の神と指すものを云はれたるを即名義に取り爲したるもの丶如し畏むとは人の神に對するよりいふ言にて直ちに神の御上を指して云ふ言にはならず然れば自他の違ひたる言釋なり

加微と云ふ言義は先つ加の音に三等の義ある由より云はすばあらず加の音第一等の義は物の相對へる義第二等の義は淸き義第三等の義は隱れて見認め難き義なり

此他末義に短き義あり(此等のことは音義本末考に云へり但し此書は巳に上木のものあれども漏れたるとどもあれば近頃改正爲たる一本あり舊印本に據ること勿れ)第三等の隱れて見認め難きは(第一第二の例は今玆に要なければ云はず)香風(セ。の音義は迫る義にて見認め難き大氣の迫るを云)又幽霞(加は猶見認め難き義なるを須美二音を副へて幽に見ゆる義となる)隱又助辭の疑も此義より疑ひの意となる又必は之に反して不有疑なり)又同音にて隈(八十隈など見認め難き隈を云ひ河隈も折れ曲りて見渡し難きを云)神代(鄕名)神稻糯米暗隱又萬葉に冥といふ言ありてこゝろぐゝは心の冥むを云皆加微の加と同音なり(異怪なども同音にて同義なり)然れば加微の加は此義にて隱れて見認め難き義なり微は靈なり(其由下に云ふべし)古事記造化の神の下に隱身とある則之なり(古訓古事記にミヽヲカクシタマヒキと訓めるはわろし然訓みては固顯れ坐しが後に隱るゝことになればなり又富樫廣蔭がミヽヲカクシタマヘリと訓みたるは隱而有の意なれば意はよく適へども古事記の文例大概云々キ。と訓むべきに適る所に也の字を置ける例なれば大國隆正が隱身也と訓みたるぞよき)然れば加微と云ふ言は固造化の神に係けて云へるが原にて他の神にも轉したるものなり又造化の神の中にも神產巢日神とある神專ら其本なることは高は

顯れたる義にて則幽中の顯事に關りたまふに因り(物は高きに從ひて顯はるゝは云ふも更なり嶽丈竪等も此れに同じ)神は幽中の幽事に關り給ふに因る書紀大穴牟遲命の御言に吾所治顯露事者皇孫當治吾將退治幽事(此前に神事とあるを合せて此所も加微古登なり)此ぞ神とは神產巢日神の神其原なる明證にはある然るを古事記傳を始め諸說唯美稱に高と神とを產巢日の上に副へたるものとあるは最粗漏なり此の高と神との言にて顯事に專ら關り給ふと幽事を專ら知り坐すとの神德の別を表したるものをやゝ若し高も神も美稱と見る時は顯幽の本源を知り坐す二柱の神の全く同じ御名になりて御名に其御功業を負給へることなきものとなれり

斯くて微は靈なりと云ふは山津見神海津見神等の山と海とは正字にて津は之に同く上下の言を連ぬる助辭にて(天津神は天之神國津神は國之神なるが如し)下の見は借字にて則靈なり然れば山之靈神海之靈神と云ふ言なるにて知るべし然るを先哲の說に見を母知の約りたる言として山津持海津持と爲たるは持別て生坐と云語のあるより云へる說なれどもそは巳に其掌り坐す御業によりていふ言にて末なるを直ちに指して稱ふ御名と爲せるは本末の迹のみならず津は之なるに山之持海之持と云續きはいかゞなり例へば宰と云ふ言はあれと御言之持といふことはあらぬが

如し然のみならず之も津も其下には必體言の續く格にて用言にて持と受る例は絕てあらぬことなれば見を持とするは僻事なり

又此微同韻の知にも備にも通ひて微知備の三言とも靈の義あり然るは野推久久能智等も野之靈蛇之靈又鹽土雷も鹽之靈嚴之靈なり(推土などは助辭と實辭とを一字に備りたる例は他にもあり)然るを諸說この智を稱へ言と爲すはいまだし然する時は野推鹽土などは單に野又鹽のことになりて神の御名にはならざるをや又備も同じく萬の物を產し給ふ御靈なるを以て產靈神と稱へ禍津日神は禍之靈なり火產靈稚產靈皆同し(此の事は下の產靈神の下に委しく云ふべし然れば久志備といふ言も奇靈なり此等を以て加微の微は靈なること明なり)

此の一音の義を以て言の原義を明らむることは未だ世に汎く人の云はざることなれば信けぬ人もあるべしと雖も明に其義を覔めて之を千言萬語に試る時は始めて雲霧を開く思ひ無きことあらず其委しきことは音圖大全解又語原考に云へるを見て辨ふべし此をいさゝか發明したる者は文化の頃尾張の人鈴木朗が雅語音聲考といふ書を著して其端を云ひたるが始めなり其後平田翁の五十音義訣鈴木重胤が語學提徑荒木田守訓が詞の聲の親清原道齋があびきの綱等に五十音の一行に一義を備へたることを云へり然れども每音必二三義以上の意義具りたるを一行の義を一義と爲す時は千言萬語の本義を明むるにかたしといへども言靈の幸ふ國の國人として言靈の妙を知らず或は之を信せぬ人に較べては此等の人々は言靈の言靈たるを悟りたる人と稱へつべし

## 神名は其主宰ます御業に因る事

神の御名は其知り坐す御業を稱へて負せ奉りたるが多かるは例へは大宮賣命は皇御孫命の同殿の裏に坐して大宮を守護坐す事を知り坐すに由りて即大宮賣命と稱へ奉れる類の如し大殿祭詞の首に大宮賣命登御名乎申事波云々と云ひ起して其文の續きに其名の如く述べて其尾に大宮賣命止御名乎稱辭竟奉良久登白と結めて首尾照應したるを以て其然るを知るべし又御門祭詞に櫛磐牖豐磐牖命登御名乎申事波四方內外御門爾云々と云ひ起して其結に櫛磐牖豐磐牖命登御名乎稱辭竟奉良久登白とあるも同じく此二篇の詞共其の初めに云々と御名乎申事波とあるは即其御名を解釋したる如きものなり此他の祝詞にも御名を白弖とあるは皆神達の御名は其知り坐す御業或は其の神性を稱へ奉りたるものなれば御名を白すは即稱辭竟奉

る意になればなり猶云はば古事記上卷に須佐能男命の大穴牟遲神に詔給ひし御言に意禮爲大國主神亦爲宇都志國玉命而云々とあるは此時未だ大國主神と云ふ御名は負ひ給はぬを今より後ち大國の主と爲り又現國魂の神と爲れと詔給ひしを大穴牟遲神は其御言の隨に勤み給ひしに由りて終に大國の主國魂の神となりたまひしを以て則ち御名に負ひ給ひて大國主神とも現國魂神とも稱へ申奉る事を覺りて御名は則其業を直ちに稱へたるものなるを思ひ定むべし(諸の神達の中には其神性により或は其成坐せる時の所以によりて負給ひしもなきにはあらざれども遂に其御名その爲したまひし御事跡となり或は御事業とならざるはなし例へば建御雷之男神は其神性の健く嚴しく坐すによる御名なれども總に其御名の如く猛き御心を以て荒振神を征め給ひし御事蹟表はれ泣澤女神は其父神の御母を慕ひ坐したる御涙の所以に因れとも遂に命歸の神となり給ひしが如し諸神の中には地名により又稱へ名なるもあれど主と國土人民等の事に關り給ふ神は大概其掌り給ふ御業によれり)景行天皇の御言に大倭國者以行事負名國也と詔給ひしは人の上のみにはあらざるぞかし古語にも名は體を徵すと云ひて其體と用とを表はすものなれば古業を名と云ひしは即用を徵たるなり古事記允恭天皇の段に氏氏名名とあるは氏々の家の業を云ひ續日本紀の宣命に祖名乎戴持而とあるは祖先以來の家の業を身に負擔するを云ひ萬葉集十八に祖名不絕とあるも祖先傳來の家の業を絕じといふことにて何れも業を名といへり是以て名は業を云ひたるものにて名の如く勤むるが即業なることを辨ふべし人は所謂有名無實なるものあれども神達には素より其御名を負給へる如く坐さぬは一柱だにあることなし故諸の神達の御德を辨へむには必先其御名の義を明かにするぞ主たる事なる

## 天御中主神

此御名を明めむには先阿米の原義より極めずばあらず然るに阿米の阿の音に限りなく廣き義あり(阿音に其の義を具へたる由は音義本末考に云へり)例へば阿に廣く世に挾き義あれば廣き所に境を成して狹めたるを畔と云ふが如し(清音の濁音に變ずるに三義あり此の世の濁は意を強むる爲めの濁なり此のことの委しき說は音圖大全解に云へり)本居氏の說に畔はアなりセは背の義にて畔背なりとあれども阿行には一音にて言となる例絕えて無ければアゼの二音猶畔一物の名なること紛なし又米の音に周の義あり此の二音を合せて阿米は此の地球を廣く取周らしたるを阿米と云ひ始めたるものなるべし例へば海の周を海邊と云(マとメと同音なり又其小

なるを濱と云アマハマも同音なり)和名抄郡名に海部を安萬と注せり(豊後國)又姓氏録にも海と云氏あり海漁を業として海邊に住む人を海人と云ふも是なり猶云はゞ偏といふ言も其區域をなしたる周圍の内に遺る所漏るゝ隙なく敷渉るを云(阿麻は同じく禰久は年麻禰久など古言に云禰久なり)又其周圍の外に出るを良行に活用して阿麻理阿麻流といふ此を以て阿米の義を思ひ定むべし然るを阿米は網と同義とも葦牙の約りとも又仰見上り方等いへるは推當たる説なるのみ然して阿米とは天上をも云ひ又日月諸星の係る所を廣くも云へり天高市宮天岩屋等は天上の方にて天津星天津風天津雲等の阿米は大虚空を廣くいへり此ノ神名の阿米は大虚空の内を廣く云へる方にて地をも包含せり(海といひて陸をも包含せる例あるが如し)御中の御は滿の言より出て勝秀たる意とも正中の意とも又副たる意ともなる御山御谷御崎等の御は勝秀たるをいひ御中御空等は正中を云ひ又輕く副へて御雪御吉野御熊野等とも云此御を同音の麻にも轉じて眞金眞心眞淸水等美稱方ともなり又母にも轉して六合之中心(神武紀)天の中央(天武紀)御堂のもなかに舞姿ゆはせ(榮花物語)などとも云へり而して此御名の御は實語の御にて滿の意なり故に御中と續きて阿米の周圍の内を遺る所なく全くと云意となる主は領を云ひて廣く大きく領むるを云(領は古事記上卷に汝之宇志波祁流葦原中國者云々祝詞式に山川能淸地爾云々吾地止宇須波岐座世止萬葉五にうなはらのへにもおきにもかむづまり宇志播吉います同九にこの山を牛播神の云々等例多し其宇斯は神代紀に大人此云宇志とある如く大なる意波久は佩に同しく我が有とする意なり此天之御中主と云言を取統て云はゞ天地間大虚空の中を悉く領き坐す意にて凡天地間に在りとある森羅萬象の元素は皆此神より出て御靈の寓らぬはなし例へば動物の心經の本は腦髓の内に在りて其末の身體中に彌綸して至らざる所なきが如し

### 高御產巢日神

### 神產巢日神

此ノ御名の產巢日の三言の中巢日の二言は借字にて書紀に產靈とあるが正字なり(高と神との二言の意は既に加微之言義の下に云へり)然して牟須は古事記傳に生なり其は男子女子又苔の牟須などいふ牟須にて物の成り出づるをいふ日は物の靈異なるを比と云ふとあり此說誤れるにはあらずと雖も牟須を生すとするは第二の義にて第一の義は締の意とおぼゆ(漢字の一字に多義を兼ねたるは勿論歐洲語にも猶一言に二三言を具へたるものあり例令ば佛蘭西語のドロワーなる語は第一義法律

の意にて第二義榴利の意あり又此のドロワーは原羅何語のヂレクトレムの語より来りしものにて直の義をも具へたるが如し皇語も之に同じく一言に二三義を兼ねたるもの尠からず牟須比は牟須比牟須布と活動する詞を體言の格に牟須比とは云へるものなり而して其の締といふ意は此の二柱の神の奇異なる神德を以て萬物の元素を締ひ給ふ御德を稱へたるが其締べる萬物は締の力の凝れる極に至て其締ひたる中より發生するものあるを生とはいふなり此れぞ第一義は締の意にして第二義は生の意なる(甑にて物を蒸すも其原義は遂に同義に落つめり何とならば甑の内に物を結めて其氣を漏さぬは即締に同じく然して湯の氣の下より蒸し昇るは則生なり又物の實を地に伏るは締にて其實の中より牙の發るは生すなり)凡そ天地間の萬の天然物にして此理に脫るゝものはあらず大同類聚方に保豆禰乎牟須比阿都无とあるは精液の凝り締びて人身の始めとなるを云ひ然して終に生れ出るは則生の意なり神遣方に美豆保乃介乃不多都乎加波世氐保豆禰奈理云云とあるをも合せて思ふべし火産靈稚産靈生産靈足産靈玉留産靈の牟須比も之に同じ其同じき由は生足玉留産靈は人の體中に靈魂を締びて其靈魂の妙用發揮するを知り坐す神なれば其靈魂を締び留め給へるは第一の義にて其妙用の發揮は取も直さず第二ノ義なり稚産靈は前に云へる草木の實の理に異ならず火産靈は火の元素を締び凝らして火の發ることを知り坐す神德おはしませは猶牟須比の言義相同じ

此二柱の大神の御名に負ひ給へる御神德の發輝して御功業の著明く顯れたるを始めは古傳に一ノ物在於虛中とあるは此神達の締び給へるものなれば則第一の義にあたり其一ノ物の牙を含みたるが終に如葦牙萠騰とあるは則第二義の生すに適る此御功業の顯れたる形狀より泝りて見れば御名の意彌著明なり中古の歌ながら詞花集戀ノ部に心さへむすふの神やつくりけむとくるけしきも見えぬ君かなとあるは御名を締ふの意にして結ぶに云ひかけたるなり

第二義の生となる時は牟須比の比は靈異にはあらずして比は直ちに御靈にて萬物を生出し給ふ御靈なり(靈はやがて靈異なるものなれば靈異と見むも强ひて誤りといふにはあらざれども萬物を生給ふ靈異には言譲かず生給ふ御靈とつゞくべきなればなり)書紀に産靈と書けるは正字なりと前に云ひしは是なり此肥又美に通ひて猶靈の意なること加微の言義の處に云へるが如し

猶立復りて云はゞ渾て物の發生するは其元素の凝り締びて其中より進み出るものなるは牟須の二音の本義に具れり然るは牟音は唇を結ふ際に發る音にて物の集り

衍る義を成せり其は群村室茂䒾綮蒸咽睦共宗結等の牟皆其の意なり須音は舌を進めて衘出す際に發る音にて物の進み且細長き義を成せり其は進逑澄行直筋管杉𣿰楚の須皆其意なり然れば此の二音に凝り集りて其中より進み出る形狀を具へ光るなり此レより次々の御名に就きても各其言の音義を擧ぐべきものから其解の類はしくなれば以下は大概之を略けり其言の音義は音義本末考に合せて辨ふべきことゝす此等を以て産巣日神の御名に第一第二の二個の義あることを知るべし

## 宇麻志阿斯訶備比古遲神

此ノ神の御名は普通の説に宇麻志は美稱にて阿斯訶備は如葦牙因萠騰之物成神なるにより比古遲は男神を稱す尊稱とのみいへるは一ト渉り聞えたるが如しと雖も此神の成坐せる原理より云へば固此神は天御中主神の御靈を分ちて彼の一の物の主となし給ひて山物植物動物の元素とし給ひそれを産靈神の發生せしめ給ふによりて葦芽の如く萠騰る物と共に成出給ひし神に坐せば則山植動物三ッの物の元素を成し給ふ神德に坐す是に因りて思へは宇麻志は宇麻波流といふ言を形狀言の格に轉して宇麻志と云へるにて奇しみあやしむと云詞をあやしあやしきと轉し貴みたふとむと云詞をたふとしたふときと轉しいへるが如し物を美稱て有麻といふも言の本は同じく有麻は物の大なる意あるより稱美る意ともなれるなり然して有麻波流は允恭紀に蕃息仁賢紀に殖の字を有麻波流と訓めるが如く物の蕃息して大に成る意にて山物に適へり阿斯訶備は葦芽にて葦は國土の始めに先ッ生じたるものなれば植物の祖は葦なるを以て即植物に適へり比古は男子にて動物の長は人にて男を以て始めとすれば比古は即動物に適へり遲は加微之言義の下に云へる如く御靈なり此遲は比古にのみ係りたるにあらず宇麻志にも阿斯訶備にも比古にも係りて山物植物動物の靈と云意になれり



## 天之常立神
## 國之常立神

古事記傳に云天之常立神は姓氏錄に天底立尊とあり又國之常立神を書紀ノ一書に國之底立尊とありかゝれば御名ノ義登許は曾許と通ひて同じ凡て底とは上にまれ下にまれ横にまれ至り極る處を何方にてもいへり云云此御名は常は借字にて天之底都知なりとあるが如く此二柱の神は天と國との極底邊の御靈と坐して則天之底之靈國之底之靈にて天と國との軸の如く天國を保ち給ふ神と坐すことは御名にて知れたり然るを天之常立神の下に別天神(古事記)と云語をかきて此所にて段落をな

し其下に國之常立神を記したれば此二柱の一對に坐すが別れたる如きものながら唯此ノ天之常之神以上を天津神とし以下を國津神と天國を分ちたるのみにして猶一對の神に坐すこと固よりなり又此二神天と國との底に御靈を留め給へるは其天國を不朽に固め成し給ふ爲めならんことは此登許と云言は底邊の意のみならず登許は萬葉三にいはがねの凝敷山同七に許其志可毛いはのかむさび同十三に許凝敷道之なとある許其も登許も曾許も皆音通ひて義同しく天と國との凝岩の如く固く凝し給はむことを掌り坐す意をも含めり

## 豐雲野神

豐は古事記傳に物の多にして足らひ饒なる意の言にて稱へ辭なりとあるは由太加といふ言の釋にて登與の釋には適はず豐は大にして盛に勢ひあるを云言にて朝日乃豐榮登といひ又豐旗雲と云ふ大にして勢の盛りなるを云へるにて知るべし(豐年といふも其一年の饒なるを云へるは末にて本は稻をはじめ穀類の生ひ立ち勢盛りに登りの大なるを云へるなり)それより物を美稱て豐御帛豐明豐稱などもいへり神の御名にて豐布都神の豐は實語のまゝにて(此神布都とあるごとく劍の御靈にて神性の上を思ふべし)豐石窓豐玉毘賣などの豐は輕く稱へ言に副へたる方なるべし雲野は固より借字にて久母は久美久牟にも通ひて物の集り凝りて芽出ヽ意の言なり角久牟芽久牟泥久牟の久牟も皆然なり雲も猶集り凝るものなれば本同言なるべし野は主なることは舊說の隨にて適へり此神は宇麻志阿斯阿備比古遲神の山物植物動物の原を掌り坐す中に分ちて植物を專ら知り坐す神なるべく其植物の發生の意を負ひ給へり

## 宇比地邇神
## 妹須比智邇神

此の宇比地邇神以下阿夜訶志古泥神迄の先靈の說に取る可きもの未だ聞えず殊に古事記傳に角杙神の下に神の御形の生初めたる由と云ひ又淤母陀琉神の下に面の足り具れるを云ふとあるは甚僻言なり然云はゞ神は其の始め御手足も御面も具り足はすして生坐したるものとせむか今此地球上萬國の人の其面の色又身の大小等こそ小さか異りもすれ其形皆同じく生れ出るは造化の神の御形に肖たるなれば人の形もて泝りて造化の神の御形も窺ひ知らるゝものなるをや又此七柱の神のなし給ひし御事跡の傳もなく其子の御名も見えず單此所に御名の見えたるのみにて所謂絕消といふものゝ如くして國々に此の神を祭祀れる神社の聞ゆることもなし(古

事記傳に角杙神は姓氏錄に角凝魂命又た神名式に出雲國神門郡神魂子角魂神社などあるは此神なるべし又活杙神の下に神祇官に坐す御巫の祭る八神の中の生産日神は此神なるべしとあれども小さか其御名の似たるまでこそあれ此神と定めて云ふべき證もなし然れども若此神ならば伊邪那岐伊邪那美命の此御名に適へる御功德を祭祀給へるならむ）又造化三神の所に國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用幣流之時とありて次に天神諸命以云云修理固成是多陀用幣流之國とあり次の是と指し給ひたるは猶初めの多陀用幣流ものなり然るに若し此所の七柱の御名の神實に坐しならむには七世を經むには許多の歲を經む天神何でか其間多陀用幣流隨に置き給ふべき此等を思ひ合せても實に是七柱の神坐しましたるにはあらじ然らば此神の名は何にとならば此の名は伊邪那岐伊邪那美命の其國土を修理固成爲し給ふに漸に成り整ふ涎を神名に配り稱へて申したるにて則二柱命の亦の御名に比しきりのなり然れば宇比地邇神より阿夜訶志古泥神までの名義は其意を以て見るべし先づ宇比地は稚土にて（土を比智と云は土形築土など例多し）然るを比の同音重れば一音省きて宇比地とは云なり（同音の重なる時一音省くは常の例なり）其の稚は神代紀の一書に國稚とあるを忌部正通の口訣にウヒシと注せるが如し物の稚くして未だ熟せざるをいふ言にて稚の字を書けるにて明なり則稚々しき土を云邇は和なる物の漸に固るを云音轉あり（邇を土とする說あれど然しては土と重りて聞えず）煮丹荷檢の二之に同じ又出雲風土記に是者爾多志枳小國也とある爾多志枳といふ言も濕り浮りたる形容を云言にて此邇猶同じ然れば此稚土邇とあるは國島の成る始めに未熟らざる土の和きて稍々固るを云へるなり又須比智邇の須比は古事記傳に沈比地なりとあれど宇比を浮の意とする時は須ば沈と云はむも然るべしと雖も今已が案ふ所によれば須比は次なるべし次を須比と轉じたるは天武紀に次云須岐と見え將に及び次々を須加比と云（加比の約り岐にて岐は比に通ふ）然云意は稚々しき土の固りたるに追ひ次ひて今一際固く成りゆくを云へるならん此より次々の妹某とあるも皆其男神の成りゆくに次きて其を補ふ義あること次に云を以て辨ふべし

## 角杙神
## 妹活杙神

角杙は二字共借字にて芽の都奴具牟を云へるなり都奴は物の短く張り出たるを云ふ獸の角も之れに同じく其形より名付けたるなり具比は芽具牟涙などの具牟に同じく物の纔り凝りて未だ其形長からぬ義なり杙も纔に張り出て其形の短きをいへ

るにて同義なり古事記に小竹之葯栰とあるも葯りたる跡の短く殘りたるをいふ和名抄に株草木之本久比世とある是なり又管栗胡桃烏芋小島芋等の久も皆同じ然して此名義は前の宇比地邇須比智邇にて稚土のやゝ固るに隨ひて先つ葦の芽具美出つるをいふにて此れも二柱の神の國島を成し給ふ次第に因るなり今も海岸に寄洲といふものにして稍新田の成るを見るに其寄りたる洲の固る頃先づ葦の芽を發るものなる由此の時其所の土民之れを見て數多集り潮入りを防ぐ爲め絶斷の堤を築くまゝに其堤の内新田と成るといへり神世も今も變らさるに就けても造化の妙疑ふ可からずさてかく葦の芽を發るは其の根の接合と成りて荒浪に崩れざるためならむ是を以て天上より見れば恰も葦原なりけむ故に葦原中津國とはいへるなり次に活栰の活は生にて其短く發生なしたるが彌が上に生ひ繁るを云へる義なり此れ前に云へる如く妹とあるは皆其並びたる男神の名に次ぎてそを補ひ資くる義によればなり

## 意富斗能地神
## 妹大斗乃辨神

名義は大概古事記傳の說を可とす但意富は單に稱辭とのみあるは粗し意富は小よ

り大に進む意にて彼國島の稚々しき土漸固り葦の生しつゝ次第に大きく成る形狀に因るなり斗は古事記傳に處を斗といふ例多し立處伏處寢處祓處の如し弘仁私記の序に古語謂居住爲止とあるも處の意より出たり能は之てふ辭なりとあるが如し而して地は例の尊む稱なりとあるはわろし地は前に云へる如く靈にて國島の大きくなる靈の義なり次に妹大斗乃辨の辨は女をいふ言にて百師木伊呂辨(明宮の段)八坂振天某辨(崇神記)又級長戸邊等の如し然して女を辨と云ふは閉の音に物に物を副ふ義ありて重(二重三重)甚合副揃準等の閉又延久の音にて副へ合せたるものを分る義となる)隔(断にて相副ひたるものを断つ意となる)此等の閉の音義皆同じく女は男に副りて男の業を資る義にて辨とはいふなり此神名も男神の國島を漸に大きく爲に副りて益大に成す義なるべし

## 游母陀琉神
## 妹阿夜訶志古泥神

游母陀琉は書紀に足面尊と書ける足面の二字は正字にて國島の表面の足り整ひたるをいふ名なり古事記傳に面を云て手足其餘も皆凡て滿足る由に云はれたるはいと如何なる由前に云へるが如し阿夜は驚きて難聲なりとあり常の歌文などに云へ

るは然れども神名には由なし此所の阿夜は夜々にて其夜の以に通ひたるにて則彌なり游母陀琉は地の表の足り整ひ此名は其に次ぎて地底まで締り整たるを云へる名なるに地中は單に一質なる土の積き積れるものならで或は泥或は赤丹或は砂石或は岩等の重疊したるものなれば以夜は彌にて重なるをいふ言なり(夜行の言にて夜又由以など皆物の重なる義あり其夜は彌漸八重以は五百由は由都岩村由都桂等の如し)阿志古は堅く締るをいふ言泥は主なり(阿志古を堅く締る義といふは阿の音に堅固樫金角等の加の如く堅き音義あり志古は醜凝痿等の如し又泥に主の義あるは精液の古言保豆禰は秀主祝詞式に刀禰男女などある刀禰は處主宗は群主胸は身主の如し)

## 伊邪那岐神
## 伊邪那美神

上の件宇比地邇神より阿夜訶何古泥神までは國土の成りゆく形狀を神名に配て其覺に此二神を載せたるは前に云へる如く上の八柱の神名は實に此二神の亦の名の如きものなれば先つ始めの二神を擧げ次に八柱の神名を擧くべきものなるを二神の國土を修理固成なし給ひし御功德の上は彼の八神の名にて盡き此所に伊邪那岐神伊邪那美神とある御名は專ら男女の契約をなし給ふに因る御名なれば次の段に係る端なるを以て八神の次に此二神の御名をば載せたるものなり斯て伊邪は書紀の口訣に誘語とあるが如し此二神互に誘ひ催し賜へる意なり古事記傳に君を岐とのと云へる例は明の宮の段の大御言に佐邪岐阿藝又忍熊王の歌に伊奢阿藝とあるは共に吾君の意なり又女君を切むれば美なりとある中にて君を岐とのみ云へる例は然ることながら此は大御言又は歌の上にて吾君と阿より續きたる語調に從ひて美の一音を省きたるにて此例凡てには渉りがたし殊に女君を美とのみ云例なければ此說信け難し然らば此岐と美の義はいかにとならば加行麻行の音にて男女をいひ分つ例あり男を加行の音にて稱ひ女を麻行の音にて稱ふ則神漏岐。神漏美。又意男。意女。彥。姬。老翁。老女等の如し(此二行の音に此義あることは音圖大全解に委しく云へり又邪岐那美の那は親しみ稱ふ時副ふる言にて那岐美那禰那於登那世那爾杼又與那子汝等の那皆然り那流々那都加之那慈牟等の那も同義なり然れば此御名の意を取統て云はゞ誘男神誘女神の義となれり(那の音義の親む意は誘の中に自からそふべし)

## 大事忍男神

古事記傳の説に大事忍男神より速秋津比賣神まで十柱のことは下の阿波岐原の御祓の段に成坐せる神たちの一の傳へなりしが亂れて此記には彼所と此所とに重りしものなりとて大事忍男神は事解之男神にあたれりとあれども彼の神と此神とは大事と事解と唯事と云一言のみ同じくて其他御名に似たることもなく此神を事解之男に當れりといふ説は信けがたし大事とは正字にて天津神の御依の隨に國土を修理固成爲し給ふ大事と爲し覺へ給ひて生給ひしによれるならむ忍男は輕く稱へ言に副へたる例多かれど此神なるは彼大事を覺へ給ひて御心嬉しくおぼし給ふ時に際りて生れ給ひしによりて重き方なるべし或人は事は言にて言語の神の由云へども他に考へ合すべき所もなければ信けがたし

### 石土毘古神
### 石巣比賣神

古事記傳に此神を石筒之男にあたるとあるも猶取りがたし其宇波と伊波と通とあれども石の以は夜行にて上の有は阿行の意なれば其言の原音も違へり按ふに此二神は土と砂とを掌ります神なるべし上は正字にて砂を巣と云例は海邊の砂地の所を國々にて某須加と云地名多かるも須加は砂處なるが如し此二神を土と砂との神と云ふ由は此より以下風木津別之忍男神までの神達は皆家屋に關り給ふ神なるに其家屋を作るに先づ彼の地形と云ふことを爲すが初めにて其地形には必土と砂とは必用のものなれば此順序に因りて此に土と砂を知ろしめす神の成り給ひしならむ二神の名の上の石は猶土砂の類なれば賓語か但し稱へ言に副へたるにもあるべし

### 大戸日別神

同書に此神の大直日にあたる所以は那富を約れば能となり能と登とは横通音なればなりとあれども此は强ひて戸を直と爲してあてたる説といはざるを得ず故案ふに戸は猶門にて日は例の靈なれば門の御靈の神なるべし別は例多く其事を別けて掌り給ふ由なり家屋に關り給ふ神の始めに成り給ふは門戸は家屋の主とある所なればなり

### 天之吹男神

同書に此神氣吹戸主にあたる由の説は信けがたし氣吹戸は其氣吹く處を主とするに此神名單に吹男とのみあれば其義違へり殊に氣吹戸主神は大祓詞にこそ出でたれ御祓の段には見えざるをや又同書に十柱のことは下の阿波岐原の御祓の段に成

坐せる神達の一傳なりしが亂れて此記には彼所と此所と重りし物なりとあれど氣吹戸主神は彼所にあらぬを强ひて此神に當てられたるはかへす〳〵不審しきことなり案ふに吹は借字にて正字は葺なるべし然れは此神は屋上を知り坐す神なるべきは此前後に成坐せる神皆家屋に關り給ふ神なるを以ても知らる

### 大屋毘古神

同書に此神を大綾津日にあたるとあれど阿を省き津を省くとあるも穩ならず大屋は正字にて家屋の神なるべし

### 風木津別之忍男神

此神を同書に速佐須良比咩にあたるとあるは殊に强言なるべし御名に少さかも似通ひたる言もなく理の上には適はず都て懸けはなれすることなるをや抑此神名の說の當れりとおぼしきも聞えざりしが讃岐人松岡調の說に千木を知り坐す神なるべしと云へるは實に然るべし千木の言義にも種々の說あれども千木の千は同人の云へる如く風にて(古知は東風波夜知は疾風なり又近江と越前の境なるあらち山も荒風山にて荒き風の吹く由なりと越前大野人堀秀進が同國の國誌にいへり萬葉集にもあらち山みねのあわ雪寒くふるらしとあるを以ても其山の地寒さもとおぼゆ)風のために屋上の葺草を吹き亂されぬ防になしたるものなれば則千木は風木なり(人家の屋にも甲斐信濃などの山里には今も千木を揭げたる家多し)別之忍男は數多例あるが如し

### 大綿津見神

綿は借字にて海なり海を和太と云は萬葉一に對馬之渡海中爾云々とあるが如く渡るといふことなり津は例の之の意にて見は猶借字にて靈なること加微之言義の下に云へるが如し

### 速秋津日子神

### 妹速秋津比賣神

此神を例の伊豆能賣にあたるといふ說は取難し然して淸明は續紀の宣命に明支淸支と疊句に云へる如く淸きと同意の言なり淸きをあかきといふは赤心などいふにても知るべし此神は水戸神とありて川水の海に注く所を美那斗(水之止なり)といひて川と海との境なり凡て世の中の穢は川々より海に下りて淸明なる理あることは大祓詞の趣きにて知らる此神其處に坐して世間の諸の穢を淸きに復し給ふ神にておはしませば即秋津日子とは明津彥の義にます神なり速は速に御功德のあらはる

ゝを以て美稱に副へたるなり

## 沫那藝神

## 沫那美神

## 頰那藝神

## 頰那美神

那藝は和那美は浪にて海面を或は浪立せ或は和して海面の活動をなさしむるを云沫は動搖をなす時は海面に沫立つを以て輕く副りたるものなり此神達は皆速秋津日子速秋津比賣神の御子にて其御乘を資け給ふて風の神の力を藉りて海水を動かして其穢を散し給ふものなり斯くても猶滅あへぬ穢をば地中の伏道より喩取りて噴火山にて燒き盡すと云故に其火坑を僻名に汚物掃除釜と云ふも此意なり又頰那藝頰那美の頰は面にて海面を云へるにて此四柱の名義は皆同じかり御子八柱の內にて初めの四柱は海の方に屬き後の四柱は山の方に屬きませるも山海相通ふ理に因るものなり

## 天之水分神

## 國之水分神



## 天之久比奢母智神

## 國之久比奢母智神

久麻理は分配なり神名式に大和國吉野郡吉野宇陀郡宇太山邊郡都祁葛上郡葛木等に水分神社あり皆山より出る水を田に分配給ふことを知り坐す神なり又久比奢母智神の名義は汲匏持なり美比の約りて比となり非を省けり其省ける非の濁りの佐へうつりて奢となれるは語の自然の勢なり和名抄木器ノ部に杓和名比佐古掛水器也瓠は和名奈利比佐古瓠匏也匏可爲飮器也とあり又外宮儀式帳に木ノ匏二十柄とも見ゆとある古事記傳の說に據るべし是を以て此四柱は秋津日子秋津比賣神の御子にして山津見神に屬き給へることと明なり

## 志那都比古神

此神龍田ノ風神祭ノ詞に比古神比賣神並び坐すを古事記には比古神のみ見え書紀には比賣神のみ見ゆるは互に一柱を脫したるものなり然して纂疏に級長は息長と云はむが如しとあるを先哲も皆取られたれども級は息なることとさもあるべし那を長と爲したるは穩ならず(長き短きに關るべきにあらざればなり)其は書紀ノ一書に伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉乃吹撥之氣化爲神曰級長戶邊命(亦曰級長津彥)

命是風神也とある傳へに因れば志那の那は成なるべく則成坐せる意にて那里那流と活く詞の里を省きたるならん(良行の音は省く例多し例へば乘玉を久須多麻明時を阿加登支鮭手を加閉泥戯業を太波和謝などの如し)御息に成り坐せる神なれば息成の義なるべし

## 久々能智神

久々は莖なり和名抄に莖和名久木とあり又字書に莖は草木の幹也とあり萬葉集十四に久君美良(莖韮なり)同卷に九久多知和名抄に莖久々太知蔓菁之苗也とありと古事記傳に云はれたるに據るべし久々の音は進まむとする勢を含みて未だ短き義あり角杙神の下に云へるを見て辨ふべし)智は例の靈なること加微の言義の下に云へるが如し唯々尊稱とのみいへるはいまだし

## 大山津見神

## 鹿屋野比賣神

大山津見の見を持の約りとする舊説の誤なること又己が說は都て加微の言義の下にいへり鹿屋野比賣は書紀に草祖草野姫とあり古事記傳に云上卷の末に以鵜羽爲葺草とありて訓葺草云加夜と注せるが本義なり何にてもあれ屋葺む料の草を云名なり萬葉集一に吾勢子者借廬作良須草無者小松下乃草乎苅核又八に波太須珠寸尾花逆葺黑木用造有家者迄萬代とあるを合せて思ふべし」とあるが如し野は草を生ひたゝすが主にて草の用は屋葺くが始めなれば野ノ神の名に鹿屋野と負せまつりたるなり今茅と云一種の草あるは屋葺くに殊によきを以て名付けたるものなるべし斯て屋葺草を都て加夜と云は加の音に高き義あり嵩頂高岡等の加此ノ義にて夜の音に重さなる義あり八彌漸數玄孫等の夜此義なり此二音を合せて高く茂る義となる故に屋を葺くに好き草を加夜とはいふなり然して山野の神は妹妖に坐して山は樹木を繁く生ひ立たせ野は草を茂らせて共に人民の家屋の料と爲すを主と知り給へるなり

天之狹土神

國之狹土神

天之狹霧神

國之狹霧神

天之闇戶神

國之闇戶神

### 大戸惑子神
### 大戸惑女神

此八柱共に山津見神野推神の生み坐しつる神にて山神の功德を資けて山より出る水を運び及して遂に海に至る事を掌り坐せり山海の相通ふ事秋津日子秋津比賣の下に云へるを合せて辨ふべし然るに山は水蒸氣の本にて(水の體たるや極微相集りて形をなす然るに温素を得れば散りて氣となり冷氣に逢へば流滴質となりて故の形に復すと云)狹土神の狹は借字にて兆なり兆の本原は佐にて早苗早蕨等も兆苗兆蕨なるが如し(早は佐の借字にて早き意にはあらず)狹土は兆之靈にて彼の地中越氣の作用にて水氣を昇遂せしむることを知り坐す神なり次に狹霧神は其發したる水蒸氣の即霧となることを知り坐し次に闇戸神は其霧と成れる水氣の山氣の冷質に壓れて谷に降ることを知り坐せり谷を闇といふは栞倉といふ地名の諸國に多かるも倉は借字にて谷なり現に栞倉といふ所の地勢を見ても谷なることを知らる又萬葉集十七に鶯能奈久久良多爾なども重ねても云へり次に大戸惑子は其谷に下りたる水を相續ひて用水と爲し又遠く海にも運ぶことを知り坐す然るを戸惑子戸惑女と云ふは登麻登比比古登麻登比比賣なるを比の同音重れは例の如く比を一音省きて云へるなり其登は止富滿結等の登の音の如く麻登比は物を纏ふが如し此八柱の名義古事記傳の說は狹土は級にて坂路のことと云ひ狹霧は境といひ戸惑は山の多和美と云ひて闇戸の他は一も適へりとおぼしきはあらず

### 鳥之石楠船神　亦名天鳥船

古事記傳に行くことの速きをかたどりていふと口決には云ひ師は水鳥の浮けるさまに準へて云といはれき云々案ふに此神船を知り給ふによりて斯く御名に負ひ給ひしにて鳥之といひ鳥船といへるは岡部氏の說によるべし石楠とあるは楠の木の堅く磐にもなるものなれば船を稱へたるなるべし天鳥船神副建御雷神而遣とあるは海軍陸軍の將を遣るにて天鳥船神は則海軍の將として發しめ給ひしなるべし

### 大宜都比賣神

大宜都の宜は宇氣の宇の音の省れたるなり阿行の音は音の中間になる時は省るゝ例にて例へば有の音にては尾之上を乎之閇忍之海を於之乃美河內を加和知等の如し然るに食は和行の宇(食の宇は和行なることは六音假字考にいへり)なれども和奈羅の四音に異りて宇の音のみは阿行に同じく音の中間なるは省るゝなり然して宇氣は食にて食物を身に受け容るゝ義なり豐宇氣毘賣神又書紀の保食神等の宇氣皆

是なり神祇官に坐す御巫乃祭神八座の神の中の御食津神を祈年祭の詞には大御膳都神とある字の義にても明也

## 火之夜藝速男神　亦名火之炫毘古神

## 亦名火之加具土神

夜藝の夜を古事記傳に夜の字は迦の誤ならむか亦名の炫又迦具なとゝ同じ類なるべければなりとあるはわろし夜藝は猶燒にて燒を夜藝と濁るは下の速を波夜と清む隨に速の濁りの上に轉りたるにて櫛觸嶽なども下の嶽を清む隨に觸を賦流と濁るが如し火は物を燒が火の常なればなり然して此神の御名の三ある中にて此所は御母神を燒き給ひしを以て燒速男神とあるを表と傳へたるものなり速男とは火の物を燒く勢の盛に速きを云へるにて單に美稱のみにはあらじ抑火は物を燒くと闇きを照すが其用にて其質は萬物の内に含めるにあり故に炫毘古神の御名あり炫の字は字書に燿光也火光也明也と注せり又迦具土は隱之靈にて火の質より負せたるなり火の物の内に隱れ寓りて在るが如きものなるは所謂萬物に悉く熱氣の含みたるを以て知るべし故に他より火をもちて其物に接すれば含みたる火は外の火に誘れて内より發る時其含みたる物を燒きて顯はるゝものなれば此神母御神を燒きて成出給ひしは此理に因るものなるべし又此神を書紀に火產靈とある義は加微の言義の下に云へり

## 金山毘古神

## 金山毘賣神

火之神の生れ給ふまでは幽中の顯の理ありて顯世に人類の子を生むに異らず男女の神の交接に因りて成り坐しゝ御子にて所謂體生に坐すを此金山毘古金山毘賣以下は之に反して物實に因りて成り坐せる神にて所謂化生に坐せり然れば火の神は顯幽の交換際に成坐せる神にて火の萬物を變易する理に思ひ合すべし而して此二柱は化生の神の始めに成坐して其結局の天照大神月讀神須佐之男神の三の貴の三柱の神に及べるは金氣の一回物を枯すは遂に物の繁茂する始めなる理を具へたるものならむ此神の名を古事記傳に枯惱と有は取難し猶字の隨にて金氣又直ちに金山をも知ろしめす神なるべし

## 波邇夜須毘古神

## 波邇夜須毘賣神

波邇夜須は埴黏なり字鏡に埏は謂作泥物也黏也須とあり此御名を負せたるは泉の

形狀の埴を禰夜志たるに似たればなりと古事記傳にあるが如し埴は萬葉第一にきしの埴生に云云同六すみのえのきしの黄土に云云同卷にきしの黄土粉にゝほひてゆかな等ありて俗に禰婆土といふものなり

## 彌都波能賣神

彌都は猶水なり波は波里の里を省きたるならむ(良行の音は省く例あること志那都比古神の下に云へり波里は尿の麻里に同じく尿は和名抄に尿は小便也由波利とありて湯張にて張り出るを云然れば彌都波も水沼にて水の出るは則滔り出る形狀あればなり斯て大宜都比賣神より此の神まで成坐せる次第は食を製るに必ず先づ火に賴るを以て大宜都比賣神の次に火の神成り結び其食を炊く器なる釜を造るに金の神成り給ひ其釜を置る料の竈を造るに埴安毘古埴安毘賣成り給ひ又食物を製るに水無きことを得ぬは固よりなれば水の神成給ひしなり又穀物等の熟るも此に比しく先つ火氣を以て其根を温めて發生の本を資け金氣を以て空しく長茂するを服へて其幹に重要の力を得せしめ土氣と水氣とを以て之を養ふ順序ありて遂に稚産靈神成給ふことを竊く思ふべし

## 和久産巣日神

和久は書紀に稚の字を書けるごとく稚の意なり産巣日は産巣日大神の下に云へり

## 豐宇氣毘賣神

豐は稱へ名にて宇氣は大宜都比賣の下に云へるが如し然して大宜都比賣神坐して又豐宇氣毘賣神成り坐すは重復たるに似たれども大殿祭詞に屋船豐宇氣姬命是は、稻靈也とあるを思へば大宜都比賣神は都ての食物を知ろしめし豐宇氣毘賣神は其食物の中にて專ら稻を知ろしめすことなるべし

# 神名考二之卷

## 泣澤女神

古事記傳に須佐之男命の啼伊佐知とあるを合せて思へば泣伊佐波女の意か又雨を佐米とも云へば此の佐波米かとあるは共に取りかたし伊佐知の何にして佐波女となれるにや雨とあるも聞えず案ふに澤は固より借字にて應神紀に處々の海人訕哤之不從命とある佐波ならむ字書に訕は謗也雜言を曰哤とあり而して訕哤を佐波米久と訓る米久は春米久咎與米久などの米久にて其形狀をいふ時副ふる辭にて應神紀なるも海人共の數多集ひて云云なる形狀をいへるにて本語は佐波の二音なるのみ訕哤は取統へて訕る意にして火神を訕り給へる言ならむとおぼゆるは謂易子之一本乎とあるを以て火神一柱の爲めに愛しき妹の命に易へつるかもと憤みつゝ泣き給ふなり故に此次の段に火の神を斬りたまふことあるにても知るべし

## 石拆神

## 根拆神

## 石筒之男神

古事記傳に名義は式の祝詞に磐根木根履佐久彌氐萬葉集二に石根左久見手名積來之なとあるは岩の凸凹ある上を通行するを云ひて此意なりとあるは取がたし其は唯地景と其所を行くに安からぬを云へる言を以て此神の名義には負せ奉るべくもあらねばなり其上佐久見と云ふ言は苦しみの意より出たる言にて神代紀に擧體不平古事記中卷に我子等不平坐良志天武紀に朕身不平とある夜は彌にて久佐美は苦なり此れ佐久美と全く同義の言なり又萬葉集四になみのへをいゆき左具美云云同二十になみのまをいゆき佐具久美とあるは皆岩の凸凹にあらず海つ路なるをや然して石拆根拆は書紀に磐裂此を云以簸娑究とある如く其御勢の岩根裂ばかりなる猛烈に坐す神威を稱へて二柱の御名に分けて負せたるなり然るは火の神の血と云ひ御刀前より走たりといふ理に因りて神性の猛く成坐したるならむ石筒之男は石都知にて其都は之に通ふ辭にて知は例の靈なり

## 甕速日神

## 樋速日神

甕速日の甕は借字にて嚴なる由は古事記傳の說を可とす仁德紀に彌餠始報破利摩とあるも嚴しき湖の張るとつゞき書紀に甕星も嚴き星をいひ大和の地名に甕栗ま

た大なる蜂を甕蜂なと云ひ皆同じ速日は速びはやぶと活く詞にてたけびたけぶあらびあらぶ等の如し此神の御勢の嚴しく速ぶるを云なり樋速日の樋も猶借字にて光火秀等の比に同じく火ノ神血の勢の盛なる由縁に因りて嚴速日と云ふに同じき義なり

## 建御雷之男神 亦名建布都神 亦名豊布都神

雷之男の雷の字を古事記傳に借字の由あるはわろし雷も嚴之靈にて此神の御功德の雷之如く坐すより負せたる御名なれば借字にはあらず此神は石拆以下五柱の神德を合せたる理ありて石根を裂が如く嚴しく坐して火の熾なるが如き神德を備へ給ひし故に皇孫命の御先發として葦原ノ中國に降り坐して荒振神を火の物を犯すが如く征め給ひて御功業立て給ひしは則火神の血と御刀の由縁に因るものなり又建布都神とあるに就きては中卷神武天皇の段なる此神横刀を降し給ひし條に思ひ合せて此御名は專ら御刀に因れる御名なることを知るべし書紀に此刀を韴靈とありて韴の字は字書に斷聲と注して物の殘りなく斷れ離るゝ貌を布都と云へは劒の利きを稱へたる名を以て御名に負へること明なり豊布都神も單豊を副へたるのみにて同じ御名なり豊の言は豊雲野神の下に云へり

## 闇淤加美神 闇御津羽神

闇は闇戸神の下に云へるが如し古事記傳に淤加の意は未だ思ひ得ず美は龍蛇の類の稱なり和名抄に水神又蛟和名美豆知とある美も此れなり然して淤加の淤は伊の通音にて淤加美は嚴蛇にて大にして嚴しき蛇を云へりとおほゆ豊後風土記に球珠郡球覃郷此村有泉昔景行天皇行幸之時奉膳之人擬於御飯令汲泉水即有蛇龗謂於筒美萬葉集二吾岡之淤可美爾言而令落雪之摧之彼所爾塵家武等を思へば此神は龍にて雨を知る神ならむ闇御津羽は彌都波能賣神の下に云へり此も谷に住る同し類なるべし又同書に劒は火に燒き又石に水そゝぎて礪ぎてその用をなす物なれば此れ等の七柱の神等皆建御雷神の德を助けなし給へるなりとあるに就き猶案ふに刀劒は打揚げて燒刄土を附け然して之れを火に入れて燒き湯加減と稱へて湯と水と合せたるに差入ることとなり此レ刀劒製作の終りにて然も甚だ大事にすることとなり之れに因て思へば火神の血と刀とによりて神迹の末に水を遣ることを知る神の成り坐せるは此由縁によることとなるべし

正鹿山津見神

於滕山津見神

奧山津見神

闇山津見神

志藝山津見神

羽山津見神

原山津見神

戸山津見神

此八柱の山津見神の御名を辨へむに先づ山に三種の別あることより辨へずばあるべからず三種とは本山(高きを云中山(高からず低からざるを云ふ)季山(高山又中山の麓にある底きを云)是なり然して正鹿淤滕は本山を云文字は皆借字にて麻佐加の麻は眞にて佐加は則嶮の佐加なり(志支は直立して嶮しき形狀を云はむためにさかしさと活けるにて言の本は佐加なり)坂も又さかだつ山なといふも同じ於滕は於度呂にて(良行の音は省るゝ例多きこと前にも云へり)高き山の形狀を云次に奧山闇山志藝山は中山を云山に曲折重りて隈々しきが則奧山の地景なり又闇は谷にて



谷の多きも中山にあり又志藝山は繁樹山なり樹木の繁きは中山にあり次に羽山原山戸山は季山を云羽山は端山原山は字の如し戸山は外山にて高山中山の外にあるを云斯て中山は樹木の生ずるを常として人家を作り又薪の料と成り季山は草の生ずるを常として田を耕ひ牛馬を飼ひ家を葺く料となる中山も季山も皆其主とする所あり獨高山は草木を生せず其詮無きが如しと雖も高山は雪水を儲へて夏日に至りて融解して之れを人畜田水等のためにするなり若し冬月高山に氷雪を儲へずば夏月川澤乾涸して何とも成すべからず又其を一時に融解せは川澤漲り溢れて大害をなす故に天神時候に漸次をなし山神に掌らしめて人畜をして患なからしめむとす例へば倉廩に穀を備へて凶歲に當りて之れを開き飢餓を濟ふが如し天神の神鑑妙なることならずや

大雷　火雷　黑雷　柝雷　若雷　土雷　鳴雷　伏雷

伊邪那美命の御體に雷の成れるは猶火ノ神を産み給ひて燒かれ給ひし火氣の物質となれるによるものならむ斯て此名古事記傳にも解釋なし案ふに此は雷神の八種の別あるにはあらで雷の形狀の上より八種に別けて傳へたるものなるべし大雷とは雷の嚴しきより大の字を副へたるのみ火雷は固より雷は火氣あるものなり黑雷

は其火の盛なるは黒く見ゆるに依れるか拆雷は物を裂く勢なればならむ現に落雷したる跡を見ても知らる若雷は雷氣は大概立春の後より發して一年の氣の若きに依る名にもやあらむ土雷は其氣土中より起るに因り鳴雷は其音に依り伏雷は土雷に比しく其元素の土中に潛伏せるに依れるならむ然れば雷の全體の形狀を八種に別ちて名を負せたるものと知らるゝなり斯くて前の八種の山津見神の成坐せる火神の御體と此所の伊邪那美命の御體と相通へる理あり其は火神に燒れ給ひし伊邪那美命の御體に成りし雷の地中より發りて火神の體になりし山津見神の掌りたまふ山に通ひ遂に天上に至り火神の血に成り給ひし石拆神以下の八柱の神に相應して建御雷之男神の御功德を資くる理神世の傳への最も深き理あることを思ふべし然るをかゝる神理をも研究することなく我古傳を荒唐なる忘說とのみ思ひをる輩は淺ましき事なり

## 衢立船戶神

書紀ノ一書に乃投其杖曰自此以還雷不敢來是謂岐神とあるに據れば古事記傳の說の如く物を衢立て與來と留る意にて根國より麁備疎備來物を防ぎ止むる神に坐すこと明かなり道饗祭詞に大八衢爾湯津磐村之如久塞坐皇神等之前爾申久八衢比古八衢比賣久那斗止御名者申弖云云根國底國與里麁備疎備來物爾相率相口會事無弖云云とあるを合せ思へば久那斗即此神にて船戶の布は來にて其布は經に通ふ由古事記傳の說を可とす

## 道之長乳齒神

道之長乳は長道なれば道之とある道重れり書紀には道之といふ言なくして唯長道磐神とありされど萬葉二十に道乃長道ともあれば重ねても云ふことなるべしさて長道は長手ともいひて常に細手道の行手なとも云とある古事記傳の說に據るべし但し齒は心得かたしとあれども齒は固より借字にて延の約りて閉となれるが同音の波に通ひたることとなるべし御帶に成坐せる神なれば帶を延たる狀の道の長手に似たればなるべし

## 時置師神

古事記傳に御裳に成坐せるとあれば解置なるべし置師は立を多々志打を有多志なと云ふ如く延べたる言なりとあるにて一ト渉り聞えたれども猶己が試の說は次の和豆良比能宇斯能神の下に云ふべし

## 和豆良比能宇斯能神

書紀には噛煩ノ神とあり煩といふ言は物に障りて滯る意の言にて萬葉五に可爾可久爾思和豆良比禰能尾之奈可由とあるが如し病をも云ふは病に障られて清々しからぬ意なり然るに此神御衣に成り坐せる神とあるに煩といふ言由なし强いていはゞ穢しき御衣を脱棄たるは煩はしきことを脱れて心のさはやぎたるに似たればかと古事記傳にあれども單に和豆良比能宇斯とのみにては猶煩意にこそあれ其を脱れたる意にはあらざるをや此につきて案ふに此所に成坐せる衝立船戸神以下の六柱の中にて時置師神と此神と次の飽咋之宇斯能神の三柱は何の神といふ事聞えず古事記傳にも其説なし然るに此投棄給ひし物は皆黄泉の汚垢に觸れたる物なるに其の物に因りて成坐せる神なれば例へば禍津日神の黄泉の汚垢に因りて成坐したる理に比しく必禍事に關る神も成坐すべき理を脱れじ故に此神の前に成坐せる時置師神は時犯しにて今時疫など云ふ意にて時氣に從ひて犯し惱す義なるべし然して此和豆良比は書紀の煩神とあるが正字なるべし(時犯の例に依らば知豆良醜世とあるべきを煩波世ノ神とは語調を成さゞれば自然煩とのみいへるならむ下に飽咋とあるも其煩の爲めに物食ふ事の得爲し難き意より云へるなるべし斯て又道之長乳齒神の帶の狀の道の長手に似道俣神の袴の股の分れたる所の衢に似たるに因ると云例を以て云はゞ帶と衣は身に纏ひ着くものにて時犯と煩の身に罹るに似冠は脱たる處の口の開たる貌則口に關る食物に因るにもあるべし

道俣神

古事記傳に袴の股の分れたる所衢の如し故に此神成坐るなるべし

飽咋之宇斯能神

古事記傳に云書紀には御冠のこと無くて投其褌是謂開囓神とあり飽は冠にまれ褌にまれ脱たる處の口の開たる貌口に見なしたる言ならむとあり

奥疎神

奥津那藝佐毘古神

奥津甲斐辨羅神

邊疎神

邊津那藝佐毘古神

邊津甲斐辨羅神

此六柱は右と左との御手纏に成坐せる神なることは本文に見えたるが如し然して左を奥とし右を邊と爲すは古事記傳に云萬葉九に吾妹兒者久志呂爾有奈武左手乃

吾奥手爾幾而去麻師乎とある是なりとあるが如し斯て疎るは退離放等に同しく奥疎は奥より(奥沖同し)邊の方に離行く意邊疎は邊より奥の方に離行く意なり又甲斐辨の甲斐は間にて辨は方なり羅は下に添ふ助辭にて其意なし然れば奥と邊との間を云然して那藝佐毘古神の奥にも邊にもあるは聞えかたし何とならば那藝佐は上卷の末に於二其海邊波限一云云と云ひ又た和名抄に一〈溢〉一〈否〉曰渚和名奈木佐とありて言義は和淺なり則波の寄る際を云故に波限とも書けり然れば邊の方にありて奥には決めてあるべきことなし然るに奥津那藝佐毘古とあるは不審記傳に六神の名の上に奥といひ邊といひ下の疎波限甲斐と云へるは別に離して意得べしとあるは此奥津那藝佐に窮したるよりいでたるならむ上の奥邊と下の疎波限等を離しては奥と邊とに別れたる詮もなきことなるをや己れ案ふに此神を六柱とあるは若しくは傳への紛ひたるにて實は左右二の手纒に二神成坐るにて左の手纒に奥疎神右の手纒に邊疎神成坐して邊より奥に疎奥より邊に疎行く海路の往來を知り坐す二神成坐したるにて奥疎神の亦名を甲斐辨羅神と云ひて奥と邊との間に關り邊疎神の亦名を那藝佐毘古神とありけむが紛れたるにはあらざりしか甲斐は間にて奥と邊との間なれば奥とも邊ともあるべきものならぬを奥疎といふ言に牽れて後に奥津と云ふ言の副りしにて本は單に甲斐辨羅なりけむ又那藝佐なりけむを甲斐辨羅の上に奥津の言の副りしに同じかるべし此所は然見ざれは義理をなさぬことなり又此段の神は皆投棄給ひし物實一に因りて各一柱成坐るに合せても左右の手纒二つによりて二柱成坐るなるべし

## 八十禍津日神

## 大禍津日神

八十禍津日の八十は其數八十と衆く坐す神にはあらず八十は大禍津日の大と相並びたる言にて種々の禍と云むが如し其禍とは直に對へて曲の義なり單に凶惡をのみ云ふ言ならず(禍といふ字にのみ泥みかたし)麻賀といふ言の本は恒に變りたるをいふ言にて凶惡をいふも常の平安なるが變るより云へるのみ例へば病は其體の常に變るにて則曲なるを以て本の體に復るを直ると云ふが如し(直は曲らざるを云故に曲りたる物に對へて直ぐなる物の狀言を直くなはしと云其直くなるを直りなほると活用するなり)又祭祀の畢りたるを直會と云も(乃有良比と云が訓擁にて故實とすれども音便にて中昔以後の稱なり)祭祀には散齋致齋といふ事ありて其間は都て進退起居恒に異れば祭祀畢りて恒の如くなるを直會といふは直會なり(會とは其祭

祀に奉仕したる者相會して御饌等の下物を賜るに因て會とはいふなり)大禍津日神の義も猶同じ然れば麻賀とは最も廣き言なれども此所にては所到其穢繁國之時因汚垢而と云ひ又為直其禍とあれば平常に異なるをいふ中にて専ら凶惡につきて云へるものなり成說に此の二柱の禍津日神は禍を御名と負せ奉りてはあれど禍を成給ふにはあらず御門祭詞に疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃云武惡事とあるは禍事日と云神の御名の如くと詞を加へて心得べしとあるは甚信けがたし何にとならば吉事に凶事の追次ぐは脫あへぬ理にて已に云へるごとく吉事は常凶事は變にて常より變の生じ變より又常に復へる天地の初より定まれる事にて吉事凶事と行替る間より萬の事の生ずるは例ば寒暑の行替る間に五穀の成るに比しく是則神理と云ふ者にて惡事に關り給ふ神の坐すは即吉事を成し出さむとする初めなること秋氣の草木を枯すは即新たなる芽を發生せしめむ初めなるにひとしきものなり御門祭詞に正しく天能麻我都比登云神乃云武惡事とあるを御名の如くと詞を加へて心得べしと云ふは強言なり

## 神直毘神
## 大直毘神

古事記傳に直とは未だ直らざるを直す意の御名なり既に直れる意にはあらず上に為直とあるを以てさとるべし此二柱は穢より清にうつる間に成坐る神にして直毘とは禍を直し給ふ御靈の謂なりとあるに據るべし祝詞に神直備大直備爾見直聞直坐氐なとあるにても明なり

## 伊豆能賣神

先づ此御名の伊豆を豆と濁りて訓むはわろし(古事記傳を始め皆濁りて訓めり)豆は清濁に渉る假名にて此御名は必清みて訓むべし伊都幣齋宮などの齋と同言なればなり神功紀に五可御魂萬葉集一に五可新何本など五を借りて書けるは正しく清音に訓むべき證なり然して古事記傳に伊豆は既に汚垢を滌祓て明く清まりたる意にて明津の約りたる言なりとある中にて既に汚垢を滌祓て清まりたるとあるはよろしかれど明津の約りたる言とあるはわろし何とならば阿支の約は阿行の伊にて此伊豆の以は夜行の以なる上に(六音假字考に委しく云へり)秋支津を秋津毘古の秋津の意とあれども秋津の津は例の之の意の津なるを伊豆之賣は之の助辭あれば之の意の津と之と重りて語をなさず伊豆の以は夜行にて齋庭由麻波利齋忌又齋にも通ひて齋齋なども同言にて言の本は清き意なること固よりなり

底津綿津見神
底筒之男命
中津綿津見神
中筒之男命
上津綿津見神
上筒之男命

綿津見神の御名の義は前の大綿津見神の下に云へり斯くて始めに大綿津見神成坐し再此所に下中上の綿津見神成坐るは重復して如何にと疑はしきが如きものから案ふに此所なるは專ら滌き給ふ海水に因るが主にて綿津見とはわれど廣く海に係れるにはあらじ故に下中上の筒之男神の筒も土にて海中の土に因れる御名なるべし下中上と別れたるは始め水底に滌き給ひ次に中に滌き給ひ次に水の上に滌き給ひし故に其底と中と上とに別れて成り給ひしは本文に載たるが如し(水は然らむにも土は海底にのみありて中と上とにあらぬものなるが如し實に現には然れども滌き給ひしによりて自然土氣の中と上にも浮き及びたるものなるべし)如此滌き給ふ海水と海土によりて此神達の成り坐るその理は天照大神以下三神の成坐せる基と成れるに最も深き幽理あることは別に古事記の解に云へり

天照大御神

三柱貴の御子とある三神の成坐るを一と渉り云はずはあらず其は本文に洗左御目時所成云云洗右御目時云云とありて其左御目を洗ひ給ひし時に際りて天照大御神海中より成出給ひ右の御目を洗ひ給ひし時に際りて月讀命同じく成出給ひしにて直ちに左右の御目の中より成出給ひしにはあらず若し御目の中より成出給ひしならむには下に大宜津比賣神の御身より穀物の種の出たる所に於頭生蠶於二目生稻種云云(於は自の意)とあるが如く於左目云云於右目云云とあるべきを洗云云時とあるを以つて御目よりと云ふ意にはあらざることを辨ふべし序の文にも日月彰於目とはなくて彰於洗目とあるを以て稗田阿禮が傳へたるも然なりけむこと明なり然るは伊邪那岐命の黄泉の汚垢を滌き給ふによりて其汚垢の物實となり(伊豆能賣神は淸く成畢へたるに成坐るにはあらず直毘神の爲直とある如く淸く爲むとする神なり)海中の水と土とによりて成坐る底津綿津見神以下六柱と伊豆能賣神の功德に因りて其汚氣は却て淸く以都々々志支御魂となりて(神功紀大御神御自身名告給ひし御言に撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命とあるにて知るべし)成坐るは例へば植物の

根に汚物を滌く時は清き實を結び或は禍事の種となりて吉事の生ずるが如し神理の妙厚く思ふべし斯て古事記傳に御名は天を照すと云ふとは少し異りて唯弖流を延て弖良須といふ古言の格にて天照は天に坐して照り給ふ意とあるが如し又同書に此大御神は即今目前世を御照らし坐す天津日にましませり此より前に月日坐すことなしとあるはいと〲信けがたき說なり其は是より前に一年の分ちありし證ば蛭子の段に年滿三歲脚尚不立とあり又晝夜の分ありし證は一日縊殺千頭或は夜七夜晝七日などあり若し日なかりせば晝夜の分ちも一年の定めもあらざるをや（此に就けて強ひたる說を立たる學者もあれどいづれも取がたし又現に望遠鏡を以て見るに日球の體は明かに見えて須佐之男命の天上に昇り來せる時そを防禦爲給はむと大御神の男神の御裝なし給ひし御姿とはいたく異れりかゝる說を今の開明の世に誰かは信せむ此の一を以て他の古傳をも他の學者の輕蔑する種となるに至るべし然らば大御神の天岩屋に籠り給ひし時常闇になりしは何にといにはむに天照大神は日球の光線の六合に渉るべきことを知ろしめす大神に坐しますに其御主宰に離れ給ひしに因りて然る事の有りしは素佐之男命は天の下を知ろしめす神なるに（古事記には海原を知ろしめすべきことに傳へたれども書紀の一書には可以治天下とあり海原とあるは國も其中にありて猶天の下なり）泣啼てのみ坐しつゝ寧りますべき其御主宰に關り給はざるに因りて青山を泣枯河海悉泣乾とあり（泣枯し泣乾とあるは泣き給ふより起りたる故に泣といふ言を副へて云へるにて實は自ら枯れもし乾もしたるなり）其主宰の神のそれに關り給はぬ時は其活用の失ふ理は脱れぬものなるべし然れば天照大神の日球の主宰を離れ給ひしに因りて日光を失ひたるものならむ

## 月讀命

古事記傳に御名の義は師說に綿津見山津見などの如く美は持にて月夜持の意なりとあり夜之食國を所知看す大神に坐せば然もありぬべしとあるは穩ならず何とならば美を持と見て月夜の意とせむも月夜持とては月は傍になりて夜を主とする意なれば直ちに月を所知看す大神を指していふ言にはならざるをや（夜之食國と云ふは晝に對へて夜を主として云へる言ならば直ちに月の神を指して云ふとは異なり）一說に其光彩亞日と書記にあるに依りたる御名なり（亞も次も上代は清音にいへり）讀とは數にてかの御形の始めを月立と申し終りに至りては月籠と申せり譬へば望月不知夜月立待月居待月など月形によりて夜を數む故御名に負せ奉れりとある中

にて都文は亞とあるは然もあるべけれど月の形を數にはあらで日に亞きては數む意にて某日某夜と晝に次ぎて數むと云はむかた穏なるべし又試に云はゞ次黄泉にて此國土の地心にある黄泉に次ぐ第二の黄泉ならむか然思はるゝは黄泉は闇にて暗き所を云言なるに月球は日光を借りてこそ光れ固暗體なれば此國土の黄泉に亞ける黄泉の意ならむか(三大考より云ひ始めたる月即黄泉なる説はいと僻が説なることは己れ黄泉國所在問答といふものにいへり)然云はゞ後世開けたる天學の説によるものと云はむ然れども我古傳には遙に後洋人などの發明なしたる事の其本の確乎と我古傳に殘り傳れることもあれば彼れに似たりとて何でか之を厭はむ此國土の黄泉に亞げる第二の黄泉を所知看す大神なるに因りて月讀命とは負せ奉りけむ

建速須佐之男命

御名の義は建速は神性の建しく速び給ふを云ひ須佐は進にてよく聞えたり

多紀理毘賣命　亦名奥津島比賣命

市寸島比賣命　亦名狹依毘賣命

多岐都比賣命



此の神達の御名は古事記傳を始め注釋あるを見ず然れとも難き節ある御名にはあらず先づ多紀理の多は例の發語の多にて紀理は霧なるべし其は於吹棄氣吹之狹霧と成坐しつれど此神所成とあるには因れり但此段の何れの神も同じく狹霧に因りて成坐しつれど此神始めに所成に因てことさらに紀理の言を負ひ給しならむ亦名奥津島比賣とは本文に坐胸形之奥津宮とあるに因る此島は筑前國の海中にありて今恩賀島といふ由市寸島比賣は式に安藝國佐伯郡伊都島神社とあり此神なり然れとも島の名を伊都岐島と云は此等の神を齋たるに因れる名なるべければ此御名は後より廻らして云へるならむ佐依毘賣の佐は眞に同じく依は賴に同じ多岐都比賣の多岐都は書紀に湍津姫とある湍は正字にて異名非の水の湍り流るゝに因れる御名なるべし

正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命

天之菩卑能命

天津日子根命

活津日子根命

熊野久須毘命

正勝は古事記傳に書紀に正哉と書ける字の如く正しき哉といはむが如しとあれど

も興臺と(里を省くこと前に云へるが如し)見む方優るへし何にとならば下の吾勝勝速日とあるに係りて意よく徹れば也吾勝は本文の自我勝云而とある意に依る速日は建速の如く日は其速の活用に副りたる助辭にて荒びあらぶあらぶる建びたけぶたけぶる等の如く速びはやぶはやぶると活く言を速びとはいへるなり天之忍穗は忍も穗も大なりと記傳に云へるが如し耳は同書には尊稱といひ(其尊稱の意は美は比に通ひてかの產靈などの靈なるを靈々と重ねたるものなり)又一説には耳は正字にて物皆開洩らし給はぬ美稱なりといへども二説ともに適へりともおほえず案ふに耳は御身にて忍穗耳は大御身なるへし人の名にも書記に武茅渟祇なとも都は例の之にて之身なるべし天之菩卑能命の菩卑を古事記傳に菩は大なり卑は美と通ひて耳の略なりとあり菩の大なる義は然り卑は披秀光等の比に同しく(比の音に秀の義あることは音義本末考に云へり)大秀の義なるべし天津日子根命の名義は日子根其に美稱の言を並らねたるにて別義なし活津日子根命の活は生日足日生玉足玉なと足と並へたる生にて天津日子根と同じく都て稱へ言を並ねたる御名なり熊野久須毘命の熊野は古事記傳に熊野は地名にて出雲國意宇郡熊野なるべしとあり久須毘の須は古音志なれば(和名抄鹿尾菜は比須木毛とあり又祝詞式宇須波支の如し)猶久須毘にて奇靈なるべし然る時は熊野も地名にはあらで奇靈に係りたる言にて限之なるべし(八十限などの久麻なり)

### 建比良鳥命

古事記傳に此御名は武夷鳥とも天夷鳥とも天夷照とも諸書に有て何れも比那なるを此記にのみ比良とあり那と良とは横通音なり名義は此神天より降りて邊鄙を平らげたまひし功を美めて鄙照と稱へしなるべしとあり比那の鄙ならむは然るべし登理は照にはあらで猶登理にて其登理は取なるべし然云ふは取とは征伐を云ふ例あればなり日代宮の段に倭建命云々西方有熊曾建二人是不伏無禮故取其人等而遣又取而伊服山之神幸行萬葉集六千萬の軍なりとも言擧せず取而可來男常曾念等あり然れば鄙を征伐給ひし功によりて負ひ給ひたる御名なるべし(征伐を取ると云言の本は征得て我手に容るゝ意より出たる言なるべし後世も罪人を逮捕などいふ是なり)

### 思金神

古事記傳に思金の思は思慮なり金は兼にて數人の思ひ慮る智を一の心に兼持る意なり故に國造本紀に八意思金命ともありとあるは然るべき説にて從ふべし

### 天津麻羅

古事記傳には此は一神の名にはあらで鍛冶の通名なとにやとあり今案ふに神とも命ともなくことに科ともなく(科伊斯許理度賣命云云科玉祖命云々とある中にて科といふ言なし)求とあるを思へば鏡を作るための一の器の類ならむか取云云天堅石取天金山之鐵なとの類なるべきか猶考ふべし(然れども姑く神名として此所に擧く)

### 伊斯許理度賣命

古事記傳に云古語拾遺に初度所鑄少不合意次度所鑄其狀美麗とあるにて此神の名を思ふに鑄重の義ならんか度賣は老女を云稱と見えて書紀に姥と書けりとあり然れども二回鑄たればとて鑄重と云はむも穩ならず故に今案ふに鑄凝にやとおほゆ鑄凝する意にて鑄固ると云はむが如き意なるべし然れば書紀に石凝姥又已凝戸邊とある凝は正字ならむ

### 玉祖命

御名の意は字の隨にて聞えたり

### 天兒屋命

古事記傳には招祖泥とし平田氏は心彌にて思金神と御同神にて心彌は思金神を八意といへるに同じき由に云はれたるは共に取りがたし乎支於夜禰とある中にて支於は古に約り於夜の於は阿行の音は中間にあるは略くこと例なれども首の乎を略く例なし又心禰とあるも彌を下に屬けて云例も理もなし八意と云う上につくへき理なるをや然のみならず思金神は現身は天に留り給ひて其御魂を伊須受能宮に祭り給ひ天兒屋命は現身の隨皇孫命の御供にて此國に降り給ひし神なれば御同神とは云ひかたし(此事は已が神離考と云ふものに委しく云へり)又一說に許祖根の略といへるは前の二說に較へてはよろしかれど猶必す然りとはいひがたし今案ふに此御名は岩戸の段に因りたる御名にはあらで天照大御神又皇孫命に仕へ奉る諸神の首長とある由の御名なるべし然るに兒屋の古は子にて美夜都古の子なるべし美夜都古は宮之子にて大宮に仕へ奉る諸臣を云事なれば諸神の首長たる神の意にて子祖主なるべし

### 布刀玉命

古事記傳に云玉を以て御名に負せし所由未だ思ひ得ず大神宮式に著木綿賢木是名玉串とあり今此神は玉鏡和幣を著けたる眞賢木を取持給へるは此太玉串の意にも

や有らむさて玉串は手向串なるべしされば其串を略きて太手向命とも云つべしとあり大國主神の膳夫となりて御饗手向給ふ神を櫛八玉神とある玉も手向にて同じ義なるにも考合すべし

天手力男神

手力の手は借字にて發言の太ならむかことさらに御手にのみ力ありといふこと落着かねて、ちす唯力ありて雄々しき神といふ義なるべし

天宇受賣命

古語拾遺に天鈿女命古語天乃於須女其神强悍猛固故以爲名今俗强女謂之於須志此縁也とあり源氏帚木に例のはらたち怨ずるにかくおぞましくはいみじきちぎり深くともたえてまた見じ又夕霧に人ざゝもうたておぞましかるべきわざを又東屋にものづゝみせずはやりかにおぞき人にて浮舟にすこしおずかるべきことを思ひよりなと見ゆ皆女の上の事をいへるなり古事記に面勝神ともあるを合せて御名の義を辨ふべし

足名推　稱田宮主須賀之八耳神
手名推

足名椎手名椎は足撫豆知手撫豆知の約りたるにて櫛名田比賣を撫愛しみつる由の名にて是は比賣の須佐之男命の御妃に爲給ひし後に御親を思ひて稱へしものぞと古事記傳にあるが如し又櫛名田比賣の櫛は書紀に奇と作りて美稱なり名田は稻田にて地名なりと同書にあり此説にて一渉り聞えたれども又案ふに櫛は書紀は借字にて古事記の櫛に作れるが正字なるべし然思ふは本文に速須佐之男命之於湯津爪櫛取成其童女而刺御美豆良とあれば櫛名田は櫛灘なるべし(頂を古言に伊那陀岐と云)伊は阿行なれば例の言の中間になる時は省れ岐は伊の一段の音なれば其下に言の續く時省かるゝ例多し足名椎手名椎の名も老夫與老女二人在而童女置中泣とありて其老夫老女二人童女の手足を撫つゝ愛勞りて泣つゝありしに因れる名なる時は其童女も此時の形狀に因りて名に負ひたるものならむ稻田宮主は其宮の首長なるを云須賀は固より地名にて八耳は稱へ言なり

八島士奴美神

八島士奴美の士は知奴は主美は稱へ名耳の略なり此御名は後に大國主神國造りて天下をうしはき坐す時に遠祖なる故に如此稱へしにや若し然らずは八島知主とは云ふまじくてこそと古事記傳にあるが如し

## 神大市比賣

神と上に置たる例多く稱へ名なり大市は國々にある地名にてこゝも地名ならむ

## 大年神

古事記傳に年は田寄なり然云故はまづ登志とは穀物のことにて神の御靈以て田に成して天皇に寄せ奉り賜ふ故に云とあるは名義迂遠たる說にて穀を指して直ちに云意にはならねばなり又一說に年は稻のことにて春時種を下し冬に取れば一年に涉れるゆゑ然云名義は時知の略にて鳥獸草木の色音を見聞して其時を知るは年なりとあり此年は稻にてとあるはよろし穀物の惣名といはむより稻のことゝ見む方よく適へり(言の本は稻を云ひそれより轉して其他の穀物をいふことゝなる故に稻を奧津御年など別けても云へり)但し時知の略とあるは取りがたし年と云言の原義は先ツ時と云言より辨へずばあらず登支の言の本は春夏秋冬の四時をいふが本にてそを委しく云はば登支の登は連りたる物の其中間に際ありて絕え間をなしたるを云例へば霞などの棚引ける中間の纔に絕えたるを登陀延などいひ又築土垣などの取り廻らしてある中の絕え間を門と云へるが如し(倭國の名義も三方山にて取廻らしてあるに唯一方その山脈たえて口ある如きによると香川景樹の云へるぞよき)支は際を云ひて寸分斷岸等の支の如し(登又支に其意義あることは音圖大全解に云へり)然れば春より冬まで連れる中に際ありて四ノ時斷れたるを時と云(其より大に轉しては某宮の御時なども云ひ小に轉じては曉時晚時又辰の時巳の時なども云)然るを其支の志に轉りて登志となれば頻及敷等の志に同じく際あるものを敷並て一と連に云意となる故に春夏秋冬の四ノ時の際あるを連ねて年とは云ふなり然れば年は常に云年の方が本にて稻は一年に涉りて成るによりて年とも云ふにて末なり

## 宇迦之御魂神

宇迦は食なり迦の古音ケなるを古事記傳を始め宇迦とのみ訓めるは誤りなり敷田年治云大殿祭の詞に屋船豐宇氣姬は是稻靈也俗詞ニ宇賀能美多麻神とあり此の俗の字眼を著くべしといへり和名稱にも稻靈ハ宇介乃美太万俗云宇加乃美太万とあり是正しく宇介なることの明證なり然して迦の古言の介なるは萬葉集二十に枳世之己呂母爾阿加都枳爾迦里とあるにても知るべし

## 木花知流比賣

古事記傳に云凡て神名は何も美稱なるが常なるに花知流とは如何なる由にか若此

神はいまだ壯く盛の齢にて身亡給へる故に惜しみて名つけしにもやあらむとあれども試に云はば知の古言は知にて萬葉集二十に都久志能佐伎爾知麻利爲弖又催馬楽櫻人に曾乃不禰知々女等あるが如し然して其登は太の通音なれば木花足比賣にて木花の盛なる意に稱へたるにはあらざるか父神大山津見神に由ある御名なるべし

## 布波能母遲久奴須奴神

此神の御名は何にとも聞えがたし布波は古事記傳に地名かとあり然らは能は之にて布波能と句て母遲久奴と續くべし然して母遲は貴にて稱へ言なり久奴は國之の約り(國之内を久奴知といふが如し)須の古言は志にて(和名抄鹿尾菜比須木毛とあり伊勢物語にひじきもをおくるとある是なり)又祝詞式に宇須波伎坐世(古言を知らずして宇須波伎と訓めるは頑なり)宇斯の字を省くは阿行の音の中間にある時の常の例なり下の奴は禰の通音にて例の稱へ言なり此御名の意は八島士奴美神の義に同じ

## 日河比賣

日河は地名なるべしと古事記傳に云へり

## 深淵之水夜禮花神

此御名古事記傳にも水夜禮の意凡て未だ思ひ得ずとあり何かにも思ひ得がたき御名ながら强ひて云はゞ夜禮の禮は里の通音にて水遣にはあらざるか花は借字にて初か(水遣は中古のものに遣水などいふことあり初を波奈と云は其端にて常にも潮初など云へり)然云意は深き淵の其下に水を下し遣る初めになればなり此神淤加美神の女の生給ひし神なれば其祖父の神に由ある御名ならむ

## 天之都度閇知泥神

集市主なるべき由古事記傳に云はれたるにて聞えたり

## 淤美豆奴神

古事記傳に大水主にやとあり又一說に出雲風土記に八束水臣津野命の御名を襲ぎ給へり然る例多しといへり

## 布怒豆怒神

古事記傳にも名義いまだおもひ得ずとあり他の說のあるをも聞かず己れも考得ず然れども强て云はば上の怒は那の通音下の怒は禰の通音にて豆は淸濁に渉れば都にて例の之の意の都ならむか然る時は船之主にて船に由ある神ならむか

## 布帝耳神

古事記傳に說なし布帝の帝は登の通音にて太なるべし(太玉命などの太に同じ)耳は例の稱へ言にて此御名は都て稱へ言なるのみ

## 天之冬衣神

古事記傳に云此の神は書紀に須佐之男命草薙劒を遣五世ノ孫天之葺根神上奉於天とあり此の神と同神なるべし五世ノ孫もよく合へりとあり此說によるべし不由は布と約り奴は禰の通音にて布由支奴は布支禰と同じ御名なればなり同書に名義は書紀に依るに劒にぞ由りけむその布由は明宮ノ段の歌に波加勢流多知母登都流藝須惠布由云云是れなり奴は稱へ名にて主なりとある說然るべし然れども布由を振として太刀を振ることに云はれたるわろし振は太刀を遣ふ業にて太刀を持ちて御使に立し神に其遣ふ業を御名に負すへき所以なし明宮の段の歌にも太刀の優れたるをこそ稱美て詠め遣ふ業をいふべきにあらず此都流藝といひ布由といふ言を詳にせざれば此御名に負せたる意の明ならざれば此歌に就きて云ふへし先つ都流藝とは其形をいふにはあらずして須流登支と云言に近き言にて太刀を稱めて云名なり太刀のことを布都と云ふも佐肥と云も皆此れに同し布都又佐肥の言義は古言類聚の別記に委く云へり倭建命の御歌に都流藝多知とあるも多知を稱美めて上に置きたるものなり(古事記傳に都流藝は都牟賀理の約りたる言とあるはわろし)又布由は比由と同言にて(冷も同じく身に寒みて覺ゆる斗り浮なるを云故に結句に佐夜佐夜とあるにて明なり又此歌の本(母登)云々末(須惠)云々とあるは本と末と分けて云へるにはあらずして其太刀の本より末まで鋭くして打見ても身も寒き計りに見ゆると云意を詞に文なして云へるなり然れば天之冬衣神は優れて利く鋭き太刀に由れる御名なること此歌の詞に合せて知るべし

## 刺國大上神

## 刺國若比賣

## 大國主神　亦名大穴牟遲神　亦名八千矛神

亦名葦原色許男神

亦名宇都志國玉神

和名抄に但馬國美含郡佐須郷あり上代郡鄉をも國といひし例あり此御名をば國大と續くるやうによむべし上聲の注あればなりと古事記傳にあるが如し

國主とは上代大小に拘らず其地を主はける神を國主とはいひけむ神代紀に國主事

勝長狹と見え播磨風土記に汝爲國主欲得吾所宿之處また丹生姫記に豊耳命要國主女等あり是は人の世となりて國造と云へるに同じかれば各國の國主を惣べ掌る長に坐しゆゑ大國主とは稱せりと敷田年治のいへるぞよろしき

大穴牟遲神は古事記傳に師說に穴は那の假字牟は母の轉れるにて大名持なり凡て古へ名の弘く長く聞けるを譽れとすめれば天皇の宮所を遷し給ひ御子おはしまさぬ后又御子遂は御名代の氏を定め又名背名根名妹なと云ひ萬葉二に大名兒なとあるも皆な名高き由にて稱美詞人にむかひて那牟遲と云も名持てふ言にて美むる稱なり斯て此命は天の下を作り治め知り給へる御名の世に勝れたれば大名持と美稱へ申せるなりとあり人たるもの丶名譽を重んずるは何んぞ古へに限らむ此は古今の通情なり然れども其の意にて大名持の意とせるは僻が言なり又た名背名根等の名は借字にて親しみ云言なる由は伊邪那岐伊邪那美命の下に委く云へり又牟遲は貴にて稱へ言なるをや(此牟遲を一音つゝに離ちて其の原を云はゞ牟は御にて滿の本は滿の意遲は比古遲の遲にて稱へ言なれば合せて貴の意となる斯て萬葉集三六に大汝と書き古語拾遺には大巳貴と書きて古語於保那武智とあり姓氏錄には大奈牟智文德實錄には大奈母智三代實錄には大名持延喜式には大名持萬葉集七には大穴遲出雲風土記出雲國神賀詞又神名帳には大名持神祇令義解には大穴道如此那牟遲と名持と牟と母と又遲と知と二つあれども母は固より牟の通音にて同義なること更にもいはず知と遲の清濁の二あるも猶同義なるのみ牟より續きたるは音の動にて遲と濁り母より續きたるは清めるにて義に異るとなし(獨り文德實錄に大奈母智とあれども智は清濁に渉りて此所にては母智なり)稱へ言に比古遲など濁りて云へども言の本は清める言なるを比古といふ言に合するより合音の例にて濁れるのみ然るは我古言に一音の言又言の頭を濁る例は絶えてなければ此古遲の遲も比古と遲と離ちては本言は猶知なり然るを一說に那牟遲と那牟知とは別義にて那母知は名持にて其名は地の義にて大名持は大地持なり東國にて里長を名主と云ふも地主なり又村内の地所を集め寄せたる者を何國にても名寄帳と云へり又侯伯を大名小名と云へるも大地小地を掌る由なれば大名持は大地持なりといへり此說甚信難し何にとならば名主大小名なといふ詞は近昔の俗言にて名主とは惣代なといふ如く一村人民の名を一人にて引受けたる意なるべし(名主と云言は貞永式目に名主職といふとあるがものに見えたる始めなるべし然れば名主は鎌倉時代より云ひそめたる名なるべし)又名寄せは地名寄の地の字を略きたるまでのことなり又大小名は所

悶大家小家にて其名ある家筋の人をいへるならむ此等の名義は何かにもあれ上代に聞えぬ俗稱をもて神名の例に云ふべきにあらざるをや或人云古言にも地震といふにあらずや答云那衞の那は地の義にはあらざれども姑く那を地の義とするも衞に震義は何かしにてありや言義は古言類聚十二ノ卷に云へり披き見て辨ふべし葦原色許男は古事記傳に色許は醜と書きて惡み罵る言なれども此御名は勇猛を美めて云へり其も人の畏み憚る方より云へれば彼醜女などゝ云ひもてゆけば同意に歸めり後世の言に勇猛人を鬼神の如しと云ふに同じとあれども案ふに此色許は醜とは別義にて如凝といふ言を略きたるなるべし其は國造りに御心を染給ひて其業に凝り給ふ意なるべし萬葉集七に買師絹之商自許里鴨同十二に思咲八更々思許理來目八面とあり然れば葦原は葦原之の意にはあらずして葦原をの意なり八千矛神は武威の八千と多く矛を持る如き意に稱へし御名なるべしと古事記傳にいへるが如し

宇都志國玉は其國を經營坐し功德ある神を國玉國御魂と云なり其名は此神に限らず倭大國魂神を始め國々にあり皆國の經營に功德ありし神を祀りたるなり又宇都志は須佐之男大神の詔に爲宇都志國玉神と詔給へるより起れり其は根國にして詔ふ給へる御言なる故に此國を指して顯見國とは詔給へるぞかしと同書にいへるが如し

## 八上比賣

和名抄に因幡國八上夜加美ノ郡あり此れより出たる名なり

## 大屋毘古神

古事記傳に云此神は五十猛神と一なるべし其故は書紀に素盞嗚尊師其子五十猛神降到於新羅國云云初五十猛神天降之時多將樹種而下 然不殖韓地盡以持歸遂始自筑紫凡大洲國之內莫不播殖而成靑山焉所以稱五十猛神爲有功之神即紀ノ國所在大神是也また其妹神を大屋津姬命と書紀に見え神名帳に紀伊國名草ノ郡伊太祁曾ノ神社大屋都比賣神社とありさて右の如く木種を分播し給ふ神の座すによりて木ノ國とは名付けしなり又枝の用は舍宅を造るを主とする故に大屋てふ名は負ひ給ひつらむとあるに據るべし(秀成云舊事記にはまさしく五十猛神亦云大屋彥神とあり舊事記は固より僞書なれども其頃存在せし書どもを綴り合せて作りたるものにて其事實まで妄作せしにあらねば猶古傳なるべし)

## 須勢理毘賣

古事記傳に須勢理を進む意なりとあるはよろしかれど其進むは此比賣神の方より進みて夫に婚給ふ故の御名なるべしとあるは取りかたしまた同書に大祓ノ詞に見えたる速佐須良比咩則この神なる由の説は最も信けかたし其は佐須良比咩は大祓ノ詞に根國底國爾坐とあるを須勢理毘賣命は大穴牟遲神に從ひまして顯國に出まして夫神と共におはしましたるを根國云云とあるに合はず大祓は後世にも渉りて罪を根國に遣り失ふ業なるに顯國に坐す須勢理毘賣に係けていふへき理なし(佐須良比咩のことは己が大祓詞正義にいへり)然して須勢理といふ言は進み追る意の言にて火須勢理命の須勢理も同しく火の熾に進み燃る時は恰も追るばかりの形狀あればなり又萬葉十七に越國立山の長頌に之良久母能知邊乎於之和氣安麻曾々理多可吉多知夜麻とあるも曾々利は同言にて山の形の直立したるが進み追りて見ゆるを云へり斯て此姫神の御名の須勢理の進み追る義なる由は須佐之男命の御心とし此姫神を大國主ノ神に副へて顯國に出立せ給ひしは大穴牟遲神の國造の大功畢へて後其國を天孫に奉るべきに其時大穴牟遲神大功を立給ひし御勢ひの餘りに天孫の都と坐すべき倭國を犯して天孫に陵き給はむとする御心もあらば諫めよとの御心にて副へ給ひしを果して大穴牟遲神數多の御供者を從へ坐て倭國へ赴かむとなし給ふ

時此姫神進みまして夫神に追り給ひ御歌よませ給ひ御酒杯を取らして諫め給ひしは父大神の御心にて則須勢理毘賣と御名に負ひ給し由なり

## 木俣神　亦名御井神

木俣神の名は本文にて聞えたり御井神と云は此神處々に井を作りて民の利をなし給へる功ありしに因て答へ奉れる御名なるべしと古事記傳にあるが如し父の神大穴牟遲神の民に農事を勸め敎へ給ふとき其御業を賢けむとて農の業には殊に主れる井を作る事を敎へ勵せたまひしならむ(井は堰を兼ねたるならむ)

## 沼河比賣

和名抄越後國頸城ノ郡沼川奴乃加波郷あり又式に同郡奴奈川ノ神社あり

## 阿遲鉏高日子根神

鉏を古事記傳に志支と訓れたるはわろし書紀をはじめ出雲風土記等須支と訓めり記傳には鉏を志支として磯城にて石して築きたる城の固きを賀ぎたる名にやとあるは强言なり案に阿遲鉏は薦枕高御產栖日神眞髮觸奇稻田媛の如く高日子根の高に係りたる枕詞と聞えたり然して其阿遲は厚集(阿の音に太行の音を合する時は物の重り或は群る丶義となるに因る其音義は音圖大全解に云へり)小鴨(其友の群がるも

の)花の群り重なるを紫陽花(佐韋は水草の類を云葉の群り重なるを椰楡子莢の中に實の重るを小豆等云へるが如し然れば阿遲は重り當む義鉏は正字にて耕すくと活用する言が本にて其用を直ちに其器に云へるなり苅りかると活用する言に其器の鎌の字を當けるも此類なり(古事記上巻の鎌海布之柄云云)此を以て阿遲鉏は重り當むまで耕き掛げて高くなる意にて高の一言に係りたるにやあらむ

## 高比賣命　亦名下光比賣命

兄神の高日子に對へたるならむ又下光とは御容貌の美麗なるを稱へたるなるへし萬葉集十八に多知婆奈能之多泥流爾波爾等能多豆天金葉集に神奈川しぐるゝまゝにくらぶ山下てるばかり紅葉しにけりなどあるが如し

## 神屋楯比賣命

古事記傳に此神何れの神の御女とも知らず名の義もさだかならず若しは屋楯は彌高照の省かりたるにやとあり屋楯を伊夜多加弖流となさむも穩ならず案ふに若くは其住み給ひし家を稱へたるにやあらむ

## 事代主神

古事記傳に師說として擧られたるに祝詞に禮代とあるは利は留志の約れるにて禮の志留志といふことなり此意にて事代は事の志留志なり然名づけし所以は此天下を皇孫命に避奉り給ふ事の志留志なり又一說に事は言にて代は知の轉にて言を知り給ふならむ其事は國避の段に據るとあり又平田氏の說に事は猶言にて代も猶志留なれども知にはあらで志留志の略にて言の効なり然るは父大神の御言に八重事代主神爲神之御尾前而仕奉者違神者非也と詔ひし言の如く効を立て給ふ意なる由いはる件の三說の中にて平田氏の說によるべし天武紀に此神の人に著りて宣り給ひし言に吾者高市社所居名事代主神云云吾者立皇御孫命之前後以送奉于不破而還今且立官軍中守護とあるが如し神祇官に坐す御巫祭神八座の中に此神を祀り給ふも天皇の御守神なれはなり又萬葉集七に不想乎想常云者眞鳥住卯名手乃杜之神思將御知とあるも此意なり(出雲國造神賀詞に事代主命能御魂乎宇奈提爾坐とあれば卯名手乃杜の神は即事代主神なること明なり宇奈提は和名抄に大和國高市郡雲梯とあり)

## 八嶋牟遲神

八嶋は八嶋士奴美神の下に云ひ牟遲は大穴牟遲神の下に云へるが如し

## 鳥耳神

鳥は和名抄大和國葛上郡に上鳥下鳥と云鄕名あり此地に由る御名か耳は稱へ名なるべし但し女神の名にはをさ〳〵見あたらずとあり若くは耳は御女の意ならむか

## 鳥鳴海神

鳥は御母の名と同しく地名なるべし古事記傳に鳴海は成耳にて稱へ名なるべしとあれども成耳と云語の穩さいかゞあらむ又一說に鳴海を尾張の地名に依るとあれども一神の御名に地名の二つ重るは他に例もなくいかゞあらむ

## 日名照額田毘道男伊許知邇神

此御名古事記傳はじめ他の說も皆國々の地名などを重ねて云へるのみにして取るべき說一つもなし一神に數の地名を重ねて負すべき理なければなり己れも未た考ひ得す(此御名試に云はゞ日名照は下光と同しく鄙照ならむ額田は地名なるべし毘道男は比古遲に同じく美稱伊古は伊曾は勵の伊曾にて知爾は例多く猶美稱の下につく言ならむ)

## 國忍富神

忍は大の意にして例多く富は正字なるべし

## 葦那陀迦神　亦名八河江比賣

葦那陀迦は古事記傳にも說なし案ふに那陀は海邊の浪打際を云萬葉にもなだのしはやきなどあるが如し迦は處を迦といふこと多し然れば葦の生じたる那陀の處を云へるなるべし此神海邊に住み給ひしに因れるか八河江は同音に夜久波敵の意の稱へ名にやとありされど案ふに八河と句て江比賣ならむ八河は地名なるべく江比賣は愛比賣なるべくおぼゆ

## 速甕之多氣佐波夜遲奴美神

古事記傳に速も甕も稱へ名にて例多し多氣は建なるべく佐波夜は地名などにや遲は彥遲などの遲にて例多し奴美は上の八島士奴美の奴美に同じとあり案ふに佐波夜は雄略紀に綽灸を佐波夜加爾之弖と訓み塵添壒嚢抄にさは〳〵しと云は約やかなる意なりといひ源氏夕霧にさはやき給ふひまもありてと見ゆ又字書に綽は寬也とある等に據れは猶美稱にて此御名は渾て稱へ言をつらねたる御名なり

## 天之甕主神

御名は都て稱へ言なり

## 前玉比賣

前玉は書紀に所謂幸魂か又幸をなす德ある寶の玉の意にもあらむかと古事記傳に

ひへり

### 甕主日子神

外祖父の神の御名によれり

### 比那良志毘賣

古事記傳に良志は足の上畧などにやとありて比那の解なし其他の說あるをも聞ず 難ふに比那は此姫神の御姿の手弱に美麗しきを云ふならむ源氏物語などに女など の手弱なるをひはつといへるに似たる言なるべし(今も物の撓形狀をひな〳〵とも へな〳〵とも云)雛も其狀の愛らしきを云名なるへし又類聚名義抄に濫をヒナメク と訓めり良志は猶足なるへし

### 多比理岐志麻流美神

古事記傳始め說あるを聞ず(此御名强ひて云はゞ多は發言の多にて比理岐の理は良 の轉にて比良岐にて開きか志麻流は緒にて閉に同しく開閉の意にもやあらんか美 は稱へ言なり)

### 比々羅木之其花麻豆美神

比々羅木は古事記傳に枕詞なるへしとあり其花は誤字ならんか神名に聞つかねて 、ちすとあり强て云はゞ花は本波の一字なりけむを後に奈のそひて波奈となれる を字に花と書ける誤なるへし然して比々羅木之其波まで枕詞にてあらむとおぼゆ るは麻豆美の豆は淸濁に涉る假字にて此所は淸音に用ゐたる方にて其豆は須の通 音にて眞角ならむか然らは杜谷樹の葉は角あるものなれは杜谷樹之其葉眞角と係 りたる枕詞にはあらざるか

### 活玉前玉比賣神

活玉の活は猶生なるべし前玉は幸魂ならむ

### 美呂浪神

美呂は和名抄に上野國佐位ノ郡美呂ノ鄕あり浪は借字にて那も美も例の稱へ名なるべ しと古事記傳にあるにて聞えたり

### 敷山主神

敷山は重山の意なるべし式に越前國今立ノ郡敷山ノ神社あり

### 靑沼馬沼押比賣

靑沼馬の地名は甲斐國巨摩ノ郡信濃國佐久ノ郡にあり沼押は主忍にて例の稱へ名なる べし

## 布忍富鳥鳴海神

古事記傳に布忍は母神沼忍と同じく富は稱へ名鳥鳴海は六世の祖と同名なるは此神も又かの鳥ノ鄕に由あるにやとあるが如し

## 若晝女神

書紀に稚日女尊坐于齋服殿而織神之御服也とあり古事記傳に此なるは彼神とは別なるべし彼れは當時既く云云して神退矣とあるをや若し猶强て同神とせば其靈の何處にまれ鎭り坐るが現娘子に化て婚たまへりと云むかとあり若晝の。るは助音にて若比賣なるべし)

## 天日腹大科度美神

日腹は地名なるべし料は考なし度美は富にて稱へ名なるべし

## 遠津待根神

遠津は地名なるべし待根は異知禰にて稱へ名なるべしと古事記傳にいへり

## 久延毘古

古事記傳に久延毘古てふ名は雨露にうたれ風に吹かれなどして身體の壞れ傷はれたる意にもやあらむ久豆禮を久延といふは古言なりとあり此は山田之曾富騰云云を普通本に據られたるものなれども一古本には今者山田之首富騰者也とあり(此一古本は田中頼庸が多年辛うじて古事記の數本を集へたる中の一本にあり)今本曾とあるは首と字形の似たるより誤りたるものなり山田之首云云は久延彥の子孫を記載したるにて此記中他にも例あり然れば今者云云は按條となる文法にて(常に分註など云もの)文脈は久延毘古より今者云云の語を跨きて此神者足雖不行云云へ係る文なり然るを此神者云云の語を山田之云云より直ちに續きたる文と見て中古の歌に案山子をそうづと詠るに思ひよせて遂に附會して千萬神の託り給へる等いひ千依彥といふ名をさへ設けて種々の臆說をなすに至りしものなり然るは古本を見ざりしと此所の文法に意の着ざるとに因れるものなり然して久延毘古の名義は異の一音の久延に延はりたるならむ其異毘古を負せたるは足雖不行云云といふに因れるものならむ然じて足雖不行云云は彼の諺に歌人者居ながら名所を知るなどいふ如く此神天の下を經歷爲たまはずして國國の地理其の外の事をも知り給へるを云なり

## 少名毘古那神

大名持に對へたる御名なるべし毘古も那も稱へ名なる例多し書紀纂疏に以形體短

小名とあり古事記傳に須久那志とは後世にはたゞ多きに對へて物の數にのみ云へども古へは大に對へて小きことをもいへりとあるは然ることながら此神の小名は御形の上には關らずして唯大名持の大名に對へたる少名とのみ見む方穩なるへし

## 神活須毘神

活は活津日子根命の如く須毘は熊野久須毘命の久須毘の如し

## 伊怒比賣

出雲風土記に出雲の郡に伊努ノ郷あり又式に出雲ノ郡伊努ノ神社あり

## 大國魂神

古事記傳に何れの神にまれ國を經營坐し功德あるを其國々にて國魂とも大國魂とも申して拜祀るなり故に諸國に某大國御玉ノ神社と云多し然るに此は何れの國ともなきは倭の大國御魂なり此神大穴牟遲神を助けて殊に倭國を經營坐し功德そ有けむかくて倭は天皇命の鎭り坐す御國となりて他と異なれば國の名をは申さずしてたゞに大國御魂と申し又た大倭ノ大神とも申して皇朝の尊崇坐すことも殊に重かりしなりけむとあるに據るへし

## 韓神

古事記傳に名の義未だ考得ず韓は借字か正字か地名などか將韓國に由あるか凡て知りがたしとあり然れども神樂歌に韓神ありて其歌に三島ゆふ肩にとりかけ我韓神のからをきせむや云云とあり(韓をきのをきは招なり)然れば韓國に由ある神なるへし神名式に宮内省に坐す神三座園ノ神社韓神社二座とありて年毎の二月と十一月との丑日園韓神の祭を行給ふ事は貞觀儀式延喜式江家次第等に見えたり

## 曾富理神

敷田年治云大和國の郡名によれる御名なるへし和名抄に添上は曾不乃加美と注し神武紀に曾富縣とあるは後に上下に分けたりさて添を曾保里とよめるは神武紀に添山此云曾袞里能耶麻と注せるを證とすへしといへるに據るべし宮内省に坐す園ノ神社は此神なるへし

## 白日神

古事記傳に白字は向の字の誤にて牟加比なるへし式に山城國乙訓ノ郡向日神社とあり今向日町といふ名義は彼の名なるべしとあり

## 聖神

考なし古事記傳にも未考得ずとあり

香用比賣

香の字を加賀二音の假字に用ゐたるは伊香色謎命伊香色雄命の如し又和名抄に備前國和氣ノ郡郷名香止は加加止阿波國阿波ノ郡ノ郷名香美は加加美等例あり斯て香用は光曜なるべきを比賣と續きて比の同音重る故に一音省れたるならむ

大香山戸臣神

香は御母の御名に依れり戸は古事記傳に處にて山里を開きて民の住むべき處に功ありし神なるべしとあり臣は稱へ名なりとあるが如し

御年神

大年神の御名に同し其所に云へり

天知迦流美豆比賣

天知は稱へていへるならむ迦流は大和國高市ノ郡の地名美豆はみづ〳〵しき意にて比賣神を稱へたるなりと大概諸說同しかれども天知といふ言稱へ言とは云ひながら國都神の上にはいかゞあらむ又稱へ言に天知といふ言聞つかぬこゝちす今試に云はゞ天知は下の美豆に係る言にて其美豆は水ならむか天知水は所謂天水を云迦流は迦々流の迦の同音重りたれは一音省れて迦流となりたるならむ其迦々流は懸るにて天より迦々流水といふ意にはあらざるか(天の言の下に知といふ言のあるは天にて知り行ふの意にて此ニ言のあるにや)天水の懸る由の續きたるは此神比賣神ながら天水の懸りて田の業に助あるへき事を爲し給ひしに因るにはあらじか

奧津日子神

奧津比賣命　亦名大戸比賣神

奧津は古事記傳に地名かとあり若し地名ならむには和名抄に駿河國廬原ノ郡ニ息津郷安房國長狹郡に置津郷あり然れども此神竈神にて古事記傳にも諸人以拜竈神者也とある如く必戸毎に祭祀神なるを一所の地名に因りて負せむこと相應からぬてゝちす就て案ふに津は例の之の意の津にて奧は正字ならむ然思はるゝは竈は必表にはあらずして其家の奧の(今俗云勝手向)方にあるものなれば奧と負せたるならむ又大戸比賣の戸は竈のことにて黃泉戸喫とある戸なり

大山咋神　亦名山末之大主神

大山咋は古事記傳に未思ひ得ずとあり又一說に咋は角杙の杙ならむと云へども角杙の杙は此所に由なし案ふに久比は伊久比の伊の省かれたるにて活日ならむ又山

末とは大殿祠に高山の末短山の末とあり萬葉集十三に三諸者人之守山本邊者馬醉木花開末邊者云云ともありて山の頂をいふ

## 庭津日神

庭は正字にて日は借字なり古事記傳に日を產靈の比とあるはわろし此神庭火の神にて續紀文德實錄等に見えたる庭火神は即此神ならむ

## 阿須波神

古事記傳に强て云はゞ足場の意にや足を阿須と云は和名抄に越前國ノ郡名足羽ハ安須波とあるがごとし凡て何處にまれ人の足蹈立る地を足場と云場は庭の略にて大庭を意富婆と云類なり場は淸音なるを音便にて濁るなり此神は人の物へ行くとても萬の事業をなすとても足蹈み立る地を守り坐す神なるが故に家毎に祭りしにやとあり案ふに人每に祭りし意は然あるへし祈年祭ノ詞にも井ノ神に次きて阿須波比支とあり又神名帳にも宮中ノ神三十六座の中に井ノ神と共に此の二神坐し又萬葉集二十に上總國の防人の歌に爾波奈加能阿須波乃加美爾古志波佐之阿例波伊波々牟加倍理久麻弖爾などあるにても知られたり然れども阿須波を足場とあるは取がたし何かにとならば庭に足庭と云ふ語甚穩ならねばなり庭と云へば必足蹈立る地なるは固よりなれば更に足場といふへきにあらず(庭は門の内の廣く平らなる地をいふ言にて海の靜に平らかなるをにはをよくなど云ふも其意なり後世云庭とは少し異なれり)此神は庭の神にて唯に爾波といふ言にて其上に阿須と云言を副へたるは阿須は朝にて(須は佐の通音)朝庭とは朝毎に門の内をまず掃除するをもて朝庭とは云へるならむ

## 波比岐神

古事記傳に波比入君の意かとあり案ふに岐は君にはあらで猶波比伊賚の伊里の約れるなり(伊里の伊と約りたるが岐に通ひたるなり)然れば波比伊里を知ろしめす神といふ名の義にて君の意はあらざるもよく聞えたるをや祈年祭の祝詞には波比支を淸音の假字を書けるにても知るべし(岐も猶淸濁に渉る假字也)同書に云後撰雜上に通ひ住み侍りける人の家の前なる柳を思ひやりて躬恒妹か家のはひりにたてる青柳に今やなくらむ鶯のこゑ堀川百首にも柴の屋のはひりの庭にたくかひのけふりうるさき夏のゆふぐれ此等を思ふに門より舍屋の内に入るまでの間の庭を波比入といひしなり(秀成云阿須波神と此神は相並びまして同じ所を知ります神なるべし故に祈年祭の詞にも相並べて書けり)波比入とはたゞ歩み入るにて今世の言に

も入るを波比流と云是也波布とはいさゝかの間の所を歩き行くことなり故に源氏物語などに家の內などにて彼より此へ來ることなどを波比渡など云へり須磨の浦と明石の浦との間をたゞはひりたるなどと云へること咎々に見えたるも甚近きよしなり人の家の波比入も門より舍やまでは遠からぬほどなる故に其間を步行入る意なりとあるは然あるべき說にて從ふべし

香山戸臣神

前の大香山戸臣神と同じ功德ありし神なるへし

羽山戸神

羽は速にて稱へ名なり山の夜と同音並る時省く例によりて羽といへるなり戸は處にて山處に御功ありしに由るならむ

庭高津日神

御兄に同じき名にて高と云稱へ言の加りたるは同じ御德ながら御兄神に勝りたりし故高と申すなるべしと古事記傳に云はれたるが如し

大土神　　亦名土之御祖神

此神は殊に民の佃る田地などの土のことに功德ありし神なりされば大は土にかゝるに非ず此神に係る美稱なり亦名の意も同じと此も同書にいはれたるが如し

若山咋神

御伯父大山咋神に同じく若と云言の異なるのみ

若年神

若沙那賣神

彌豆麻岐神

夏高津日神　　亦名夏之賣神

秋毘賣神

久々年神

若年神以下の神達は專ら稻作の功德に因れる御名なることは古事記傳の又の考にも見えたるに己が考をも加へて云はゞ先づ年は稻のことにて若年は稻の苗の初を云沙那賣は沙之女にて沙は田植ることなり(五月處女田植月佐比良支佐乃保里五月雨等の類)彌豆麻岐は田に水をまかするなり夏高津は專ら稻作り業に關する時を云秋毘賣は秋は稻の熟る時なるに因る久々年の久久は稻の生ひ進むを云(俗言にも物の速に長るを久久と延るなと云が如し)然らは夏高津の前にあるへきを若しは紛ひ

たるにはあらざるか

## 久々紀若室葛根神

古事記傳に云久久は上と同く紀は木なり斯て是は室に造る材木の長く延ひたるを云若室は書紀に宮を美て日之少宮と云(是ノ日之少宮は檜若宮なり檜之御門などの如し)少と同くて室を美て若と云へるなりそは美豆垣の美豆と同意なり葛根は結縛ぐ綱にも古へは多く葛藤の類を用ひし故に都那と云へり書紀顯宗紀室壽詞に築立稚室葛根とあるはこゝと全く同じ又大殿祭の詞の注に古語番縄之類謂之綱根とあり(されは此神の民の舍屋のことに功ありし神なるへし)とあるはよく適ひたる解なり然して稻の成熟する結に此神の並び坐すは稻の好く登りて民榮え其住む家も豊に賑ひたる由の次第なるへし

## 天津國玉神

古事記傳に名義何かなる所以とも知りがたかれど推て云はゞ此神往時葦原中國に降り居て國經營に功ありし事ありし故に國魂と云天上の神にして國魂なるが故に天津とは云ふにやとあり又平田氏は天之常立神と御同神なる由云へり今案ふに天之常立神と御同神なることは如何なるべけれども天津國魂は此顯國の國魂の神に對へたる書にて顯國の國魂の神と同じき功の天上にてありし神なるべく聞えたり然れは葦原中國に關らぬ御名なるへし



## 天若日子

天若日子は稱へ名なるのみ神とも命ともなきは脱たるならむ又一說に彼の逆意ありしに因りて史者の略きたる由にもいへども猶脱たるものと見る方穩なるへし

## 伊都之尾羽張神

古事記傳に此神は迦具土神を斬給ひし御刀の御號なりとあるが如し或人の說に劍の惣名を尾張と云劍は諸刄にて鋒の方の張りたる故なりと云今案ふに尾張と稱ふは劍の惣名にはあらずして異靈なる功德のありし劍を云稱へなるへし然れば普通の劍ならず此劍又た熱田の神劍の如きを云へるにや(記傳にも鋒を尾と云ふことといまだ例を見ぬよし云はれ惣名を云はわろしと云はれたり)尾羽張の名は形より出たるにはあらず尾は物の末を云ひ羽は披などの波にて末の披り張るを云はむが如し何にとならば此劍の異靈に因りて建御雷之男神成り給ひて其末に至りて天津神之御子の爲めに微妙功を立給ひし基は御刀に因りて其御刀の功德の末の斯く廣く張りたるに思ひ合せて知らるれはなり又草薙の劍の御由緣も之に同しかりき故に其

神劒の鋭り座す鋼を尾張とさへ云へるをや是以熟考ふれは尾羽張と云名は其形に因る如き輕々しき意にはあらじ

天之迦久神

古事記傳に名義いまだ思ひ得ずせめて云はゞ崇神紀に七廻鐶刀とあり今此の劒をいさなひおこせる功を以て劒を扱出て鞘こゝろに稱へたる名にもやあらむとある説は幼く取離じ柔ふに本文に逆塞上天安川之水而塞道居故他神不得行故別遣天迦久神可問とあるに因りて按へば迦久神は若れは鹿子神にもやあらむ

建御名方神

建また御は例の稱へ名にて名の字の如きか中谷水垣の宮の殿に櫛御方命又飯肩巣見命などの如く堅の意の稱へ名にもやあらむと古事記傳にあり

櫛八玉命

櫛は奇にて例の稱へ名彌玉の玉は布刀玉の玉と同じく手向の約りたるなるへし此神膳夫と爲りて大國主神の御饌を手向け給ふ由の御名なるへし

天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命

天邇岐云云は書記の一書に天國饒石と稱り此意の稱へ言なり(志は助辭なるのみ)天津日高は猶稱へ言なり古事記傳の天津日の虚空の眞秀に高くあるほどに譬へたるなりとある意もあるへし又同書に番能邇々藝は穗之丹饒君にて稻穗に因れる御名なり丹とは穗の赤熟めるを云又藝は加比の約りにて饒類にても有へしとあるが如し然して丹饒君と見むより饒類と見む方優るへし

萬幡豐秋津師比賣命

書紀には栲幡千々姫とある纂疏に幡猶機也夫女功之事以識紙爲本故取以爲名也とあり古事記傳に云機具を指て云にはあらず織たる物を云神功紀に千繒高繒萬葉に倭文幡之帶是れ皆織たる物を指て波太と云例なり萬は宜てふ言にて物の足り備れるを云秋津師は萬葉三に秋津羽之袖十に秋都葉爾爾寶敝流衣などある如く蜻蛉の羽の如く細精き帛布を云へり師は師々の約りたるにて書紀に千々姫とあると同じ其は和名抄に縠は其形縐々視之如粟此間云之々良岐とある縐は他の字書に縮也とあり然れは之々良岐は縮みたる貌にて縮布縮緬なとの如くなるを云なり書紀の千々と此の師と同くて共に縅きたるを云なり上代には布帛の縅きたるを美好物にしける故の御名なるへしとあるに據るへし

天火明命

弟の命穗之丹饒と同くて稻の由にて穗赤熟なり(火は假字妄可流といふ言は萬葉十九に安可流橘二十に安可良我之波などありと古事記傳に云へるが如し

### 猨田毘古神

古事記傳に猨を佐流と訓みて名義は口尻明輝云云とあると上は光高天原とあるを思ふに尻明光彦なりさて獸の猨は此の神の形に似たる故の名なるべしとあるは同書中にての僻が說あるべし猨は佐の假字なるをや伴信友が神名式伊勢國度會郡狹田國生ノ神社の考證に猨田比古神は佐陀肥古にて地名ならむといへり猨を佐と云は和名抄に下總國の郡名猨島は佐之萬と註し式に三河國賀茂郡狹投神社とあるは今猨投村にあり又管家萬葉に高猨子之尾上丹今哉なとある例あることなり一說に猨田は佐支陀知の略にて(支と知は伊の段の音にて下に詞のつゞく時は畧く例也)皇孫命の御先立したまひしに因ると云も捨てかたき說なれども伊勢國の地名と見む方穩なるべし今も同國度會郡宇治に此神の末の存れること人の知れるか如し

### 天石戸別神　亦名櫛石窓神　亦名豐石窓神

石は其門の堅固にて石戸と云のみ別とはたゞ某別といふ名の例なるのみ櫛は奇にて豐も稱へ名窓は借字にて眞門の意なり

### 天之忍日命
### 天津久米命

忍日命は名義異ることなし久米は久美にて則其一件を組みて帥る由なり

### 神阿多都比賣　亦名木花之佐久夜毘賣

神は稱へ名阿多は地名にて和名抄に薩摩國阿多ノ郡阿多これなるへし木花は枕詞なり神名に枕詞を冠ける例多し佐久夜は則櫻なり

### 石長比賣

石長の二言は本文字氣比詞にある如し石と云ひ木の花と云ひ皆山の物にて父の神に緣あり

### 火照命
### 火須勢理命
### 火遠理命　亦名天津日高日子穗々手見命

火照は初めに火の燃起りて照明れる時に生れ坐せる故の御名なり火須勢理は火の熾に進み燃る時に生れ坐る故の御名火遠理は火の衰へたる時に生れ坐る故の御名なり遠理は物の撓て其末の折るゝ形容と云言なり古事記傳に弱の義とあれとも弱

りとは言の本いさゝか違へり委くは古言類韻十の卷に云へり又穂々は一說に火々の意といへども父神の御名に據らせ給へるものにて猶穂は正字なるべし然る時は手見は出滿の意なるべし(美の一音に滿の意の具れることは音圖大全解に云へり古事記傳に手は根に通ひ見は耳々と同じく美稱なりしとあれども然しては穂々と云言のみ不意中間にありて稻の縁なければなり

### 豐玉毘賣

姓氏錄に御父を豐玉彥神とあればそれに因れる御名なるべし但し玉は持給へる寶珠によれるならむ

### 佐比持神

佐比とは刀のことにて本文に其和邇の還る時紐小刀を其頸に著けてかへし給ふ故に其一尋和邇は今に謂佐比持神とある是なり刀を佐比と云へるは神代紀に韓鋤之劒神武紀に鋤持神推古紀に多智奈羅廢旬禮能廢佐比などのごとし此の佐比といふ言の原義は古言類韻の十一の卷に委しく云へり

### 天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命

天津日高は御祖父の御名を繼給へり波限の言の解は那藝佐毘古の下に云へり鵜葺草云云は生れ給ひし時の所以に因れり

### 玉依毘賣

玉依の玉は御姉の御名に同じく依は賴りにて親む意なり

### 五瀨命　稻氷命　御毛沼命

### 若御毛沼命　亦名豐御毛沼命　亦名神倭伊波禮毘古命

五瀨は古事記傳に嚴稻稻氷は書紀に稻飯と作る字の意御毛沼は御毛の毛は借字にて御食主なり若御毛沼も御兄に次きて若の一言の副ひたるのみ斯く四柱共御名並稻又御食を以て稱へ奉ること天津日嗣に重き由ある故なりとあるが如し神倭伊波禮毘古命の大御名は大和の京に遷り坐して天の下所知看ての上に稱へ奉れるものなりと同書にあるに據るべし伊波禮は詳ならずとあり一說には大和國十市ノ郡に此の地名あり此れに因るとはいへども其地大御名に申すへき由緣更に聞えず案ふに伊波禮は磐生にて常磐堅磐と聞きて稱へたるなるへし

神名考終

客舍にありて藤岡君にあひぬる
こゝのうれしさに　　秀成

うつそみの　人そいふなる　よみちにて　佛にあひぬと　よみちをは　みしこともあらす　佛をは　われはたのます　よみちより　くるしくあらむ　草枕　たひねのやとに　佛より　頼みある君に　あひにけるかも

後の世も今もたのまぬ佛より
人は人のみたのみなりけり

しらぬ山路にみふまとひ日暮れなむとするにやとるへき家もなくゆくへき道もさたかならず右へかゆかむ左へかゆかむこうちかたむきてまとへるをり八重むくらしけれる中に道しるへの石を見いてたらむうれしさはたくふへきものなかるへし我皇國の言語の道はしも我國民の知ら傳は得あらぬみちなれともことわざしけき世の中におのがゆくへき道をおのも〳〵おくれじといそきはしりゆくめれ婆誰しも其道たどる人なら傳得しらさるはとがむべきにあらねども専ら斯道を修むる博士等がこの言語の大道には八重むくら生ひしけりてゆくへくもあらずあれはてたるをかへりみずあたしこみちにふみまとへるはおろかなりとやいはまし罪ふかしとやいはまし

我師堀　秀成翁はもはやく斯道のあれはてたるをなけき生ひしける八重むくらをやきかまのとかまうちふりかりはらひさながらにひはりの道ひらくかごとくいたつきていにしへのうまし大道とふみひらき馬車やすくゆきかふへくなしけるのみならず道しるべの石をさへ見出たまひたるは古今に此道の上にたくひなきいさをなりけりこの道しるへの石といふものは五十連音なりこの五十連音の經緯に奇しく妙なる活用をなして天地萬物をなし給へる皇産靈の神の御功績はいふもさらなり天地の神の御德をも言語のうへにいひあらはせるよしはこの神名考をひらき見てそのおほかたをさとりねかしかくいふものは神道同志會幹事長藤岡好古



明治四十二年五月十日印刷
明治四十二年五月十五日發行

定價金貳拾五錢



編纂兼發行者　神道同志會
右代表者　藤岡好春
東京市麴町區有樂町三丁目二番地

發行所　神道同志會出版部
東京市麴町區有樂町三丁目二番地

印刷者　佐伯外美雄
東京市小石川區小日向臺町三丁目四十三番地

印刷所　大日本慈善協會活版部
東京市小石川區小日向臺町三丁目四十三番地